

すると、犬は菊枝の帯の邊まで刎上つてワン／＼。

「あ、ジョンだつて云つてゐるわ。」

其處へ犬の持主らしいでつぷりと肥つた頬髭の濃い紳士が、太い洋杖を携へて寄つて來た。

「ジョン。」と、呼ぶと主人の聲を聞いた犬は其の人の方へ走つて行く、菊枝は黒い瞳を一層大きく睜つて凝乎と眺めてゐた。

「やつぱりジョンよ、好い犬ね、あの人の犬かしら。」

「さうだらう。能く馴れてゐる、ありや獵犬ぢや。」

「ね旦那、今の人妾見た事があるわ。」

「何處でかの。」

菊枝は考へてゐたが、ハタと兩の掌を合せて莞爾とした。

「違つたわ、そら西郷様の銅像に似てゐるのよ。」

淺井は我を忘れて其の無邪氣にクスクスと笑つた、やうやく上野の森の間を透し

て陽の光が強く輝いて來た、龍宮のやうに霧の奥に見えてゐた博覽會の建物の跡がハツキリと見えるやうに霧が淡れて來た。

朝の爽快しい風は今日此頃の淺井が、うつくしい温情に一層の快感を與へた、まつたく淺井は菊枝に對する忌はしい念は去つて了つたので、菊枝の天稟な無邪氣さと快濶な處が何より老いた自分の心を慰める資料となつたのである。

で、斯うしては親子程に年の違ふ二人が、何處へ行くにも一緒に、他目から見ると、其のむつまじさが羨まれるやうであつた。菊枝も最う淺井の心が能く解つたので安心をして何處へでも行くし、待合や遠出の貸席へ行つても一緒に樂さうにするさうして皆が、「お芽出度う。」と、云ふ言葉を聞いても平氣で莞爾してゐた。

「あら、何をしてゐるんだらう。」と、菊枝は人足共が足場を池に掛けてゐる作業を珍らしさうに見て云つた。

淺井も偶と立停つて其れを見たが、直ぐ其れが大正博覽會の敷地を獲るために、むかしから江戸名所の一として人の口に膾炙て來た「不忍池」の一部を埋める工事の

下拵へである事が解つた。

「池を埋めるのぢや。」

「此の池を？」と、菊枝の眼は光つた。

浅井は軽くうなづいて「あ。」

「可厭ね、そんな事をしたら、最う蓮の花が見られなくなるぢやないの、ね。」

「眞逆皆なは埋めやしまいよ。」

「解んないわ、あんな橋を掛けるくらゐなんだもの、妾、あの觀月橋がない方が好かつたわ、だけれども便利ね、廻らなくつても向ふへ行けるから。」

「さうだの、便利は便利だ、しかしお前は面白い事を云ふな、どうして觀月橋がない方が好いな。」

「だつて可笑しいんだもの、此の池に彼様ハイカラな橋を掛けると、チョン髷のお爺さんが洋服を着たやうだわ。」

「成程」と、浅井は面白そうに笑つて、誰か那樣事を云つてゐたかな。」

「え。」

「誰が？」

「そら。」と、菊枝は浅井老人の顔を殊更に眺めたが「旦那橋場の殿様を知てゐて。」

「倉富子爵かの。」

「え、さうよ、あの殿様が昨日云つていらしつてよ。」

「お前も聘ばれてゐるのか。」

「あのね、うちの姉さんが御最負になつてゐるのよ、だから姉様が妾を聘んで呉たの、たつた一度。」

「さうか、あの殿様なら爾ういふかも知れないの、今になつても巻蓑を飲まない人だからな何處へ行くにも自慢の煙草入と煙管は離さない人だ。」

「あ。」と、やつと菊枝は讀めたやうな顔をして「全くね、遊びにいらつしやるにも大きな袋の中にいろんな、煙草入と煙管と入つてゐるのよ、さうして皆に見せて講釋をしていらつしつたわ、妾なんか些とも解らなかつたの。」

「解らないのを自慢する奴があるもんか。」

「でも解つた振をするのは大嫌ひ、ね、そら竹松葉の與作さんて雛妓さんがあるでせう、あの人がね、お客様の前で知つた振して英語を云つたらね、其れが間違つてゐて大笑ひだつたの。」

「どういふ英語ぢやの。」

「あの……あの……。」と、菊枝は頻りと考へてゐたが「さうよ、アイセンクンウつてえのよ、其れはね、妾もさう思ふつて事なんですつて、それを……。」と、アイサンキューつてえのがあるでせう、難有うつて事、それと間違つたのよ。」

「成程、だからお前も生嚙りに英語の眞似などをするもんぢやないよ。」

「え、うちの兄様も始終云つてゐるわ、齒の浮くやうな眞似をしては可けないつて……。」

恰度、菊枝が恚う云つて眼を辨天社の方へ遣ると、學校へ行く十七八の女學生が三人、何れもキリツとした筒袖の着物に、カシミヤの袴を短く穿いて、靴を穿て活

潑に歩いて行く姿が眼に入つた。

「好いわね、妾、學校へ行つて見たい。」

恚う云つた菊枝の一言は、淺井の頭腦には非常に感慨深く響いた、曾て淺井が、「房の家」で菊枝を忌はしい慾の犠牲にしようとした時に、

「妾は藝妓を廢めて學校へ行くの、さうして立派な人のお嫁になるんですから、今晚貴所の云ふ事を聞くと、もうお嫁にも行けないし、學校にも行けないんです、だから妾、貴所のお嫁にして下さい、さうでない可厭。」と、頭を振つて聞容なかつた事を今思ひ出した。

自分とは孫程も年の違ふ菊枝が、どう云ふ感化をうけたのか、其れとも乙女心の妙な好奇心からか、自分のやうな老人の嫁にならうと云ふ心になつたのは「學校」と云ふ目的が外れる反應から起つた事と感ずると、其心根がいかにもいちらしく清らかで、恚麼邪心のない處女を弄ぶと云ふ事が餘りに罪なやうな氣がしたのと、一つは自分も菊枝くらの年の娘をもつてゐる親の惻隱から起つた篤い同情の涙が、

淺猿しい厭鬱から豁然と覺めた事を、今更に強く感じたのであつた。  
で、今菊枝が女學生を見て、いかにも學校通が羨ましさうに云つたのは、益々菊枝の美しい心の悶が現はれたものと感じられて、非常に強く引きつけられたのである。

「菊枝、お前は那樣に學校へ行くのが好きか。」

「え、好きだわ、立派な人のお嫁になれるんだもの。」

「ぢやお嫁に行くために學校へ行くのか。」

「ね、そら學問がないと立派な人のお嫁になれないでせう、妾、字なんか一つも讀めないんですもの。」

「其れぢや學校に行くにしても、幼稚園から行かなければならないの、は、は、は。」

「あら可厭よ、此れでも妾尋常まで行つたんだわ、だから假名ぐらゐは讀めてよ。」

「ぢや高等へは行かないんだね。」

「え、ちつとは兄様から難かしい字も教はつたけども……皆な忘れつちやつたんです。」

です。」

「さうか、しかし今更學校へ行くとしても直ぐ女學校へも行けまいし、やつぱり新規まき直して、尋常から進まんと可かんが、其の辛抱が出来るかな。」

「出來てよ、けども皆な笑ふかしら？」

「お前は柄が大きいからな、笑はんとも限らんが、其れもお前の了簡一つぢやの。」

「どうしやうかしら。」と、菊枝は道がに外聞と云ふ虚飾に囚へられて考へ初めた、淺井は何か心の裡に企む處があるやうに思案をしてゐる。

と、辨天社から石橋を渡つてトボくと出て來たのは、年には稍派手な模様の浴衣を着た、貫物らしい鼻緒の色氣のある雪駄を穿いてゐる、菊枝の母親のお初であつた。

「あら菊ぢやんぢやないか。」と、お初は菊枝の方に寄らうとしたが、淺井の手前に遠慮をして立停つた。

菊枝は振返つたが、母を見るなら馳せ寄つて來た。

「あ、阿母様。」

「蓮の花を見物に来たのかい？」

「え、阿母様も……？」

「い、え、妾は其様暢氣な……。」と、偶と浅井の方を見て會釋をしながら「菊ち

やん、お客様かい。」

「え、さうなの、房の家さんのお客様よ。」

恚う云はれたのでお初は此の人が菊枝の旦那かと思つた、さうして何だか浅井が

菊枝の前途を塞いだ悪魔でもあるやうに、全く色里離れた、素ツ堅氣の人のやうな

氣になつて、憎らしいやうな、うらめしいやうな氣分であつた、菊枝は母親の心の裡

を知らんものから、

「阿母様、妾ね、旦那にはいろいろお世話になつてゐるのよ、阿母様からお禮を云

つて頂戴な。」

「あ、好いよ。」と、お初は答へて浅井の方へ向いて「妾、此れの母親でございま

すが、此れがいろいろとお世話になりましたして難有うございます、妾からあつくお禮を申し上げます。」

「あ、さうですか、イヤ一向どうもね、何ですか、蓮の花の見物で……？」

「い、え、お参詣に参りましたので……。」

「あら何處へ？ え阿母様。」

「そら其處の……開運出世大黒天様へさ。」と、辨天社の方を指した。

開運出世大黒天の七字が浅井の耳には奇しく聞取られたのであつた。

「どうして此様に遠くまでお参詣に来たの、え阿母様。」と、菊枝は不審さうに母親

の顔をつくくくと眺めた。

お初は悶えてゐる事を菊枝の前で残らず云つて遣りたかつた、しかし浅井の前で

あるから些か躊躇つてゐる。

「妾、はじめてよ、阿母様が大黒様へお参詣に来た事を聞いたのは……？」

お初は耐えてゐたが、あどけない菊枝の言葉に遂ひ釣込まれて泣かすにはゐられ

なかつた。

「菊ちゃんや、妾はね、唯、お前の運の開けるやう出世をするやうにと、其れ計かりが心配なんだよ。」

「だから此様に遠くまでお参詣に来たの。」

「お前のためになる事なら、何様に遠くつたつて構やしない、よ、其れにお前は……。」

「妾、どうして？」

「お前は……お前は……。」と。お初は客を取つた菊枝までうらめしくなつて来てホロ／＼と涙を滾した。

浅井は何か込入つた事情があるものと察して故意と傍を離れて、ぶら／＼辨天社内の中へ歩いて行つた、見渡せば池一面に、盆を並べたやうな蓮葉が濁つた藍色のした水の上に浮いて、高く低く清々しい花が咲いてゐるのもあり、蕾の儘に筆を立てたやうなものもあり、次第次第に打壊されゆく不忍池の、惨な名残を誰に訴ふると

云ふでもなく、たい盛の「時」を得顔に美しい化粧を、てゐる。

菊枝はだしぬけに母の泣顔を見せられたので自分も何だか悲しいやうな氣になつて来た。

「阿母様、どうしたの、え？」

「だつて……お前はあんなに兄様に云はれたぢやないか、おふねに聞くとお前はお客を取つたんだつてね、何と云ふ事をしてお呉れなんだい、妾が昔のやうな氣象なら、お前がお客様を取つてお呉れなら喜じませうが、今ぢや……。」と、跡は云ひ得ないやうに獻釈つて了つた。

菊枝は追がに母親の泣いて云ふ肚の底が讀めた、さうして自分ながら其の事情を打明けなかつたのは迂濶だつたと思つた、浅井に口止された事を、母親や兄にまで云はなかつた事が餘り馬鹿正直だと云ふ事が解つた。

「阿母様、その事なら心配は入らないのよ、妾、何にも云はなかつたから爾う思ふのでせう、だけでもね、妾、決して阿母様や兄様の云つた事は反かないわ、立派な

人のお嫁様になりたいんですもの、お客を取つたと云ふのは體裁なのよ、諛だわ、そら彼の旦那がね、妾が慙う／＼だつて云つたらね、お前は感心だ、可哀さうだつて……さうして私がお前に云ふ事を聞かせた體にしるから、お前も其のつもりでゐると云はれたのよだから、旦那と一緒に何處へでも行つてゐるわ、皆も妾がお客を取つたやうに思つてゐるの、けども、妾は唯聘ばれてゐる丈よほんとうに淺井の旦那は偉いわ、妾、決して此の御恩は忘れない事よ。」

「それぢや何かい、お前が肌を許した體になつてゐるけれども、其の實は何の係り合もないとお云ひなのかい。」

「え、諛と思ふなら旦那に聞いて御覽なさい。」

「だつて妾が……そんな事を無様に聞かれるものかね。」

「構はないわ、あ妾旦那に云つて来てよ。」と、菊枝はお初が止めやうとしたのを振切つて辨天社の方へ馳けて行つて、さうして少時淺井と囁いてゐたが、淺井が先に立つてお初の傍へ歩いて来た。

お初は面羞げに改まつた會釋をして俯向いて了つた、淺井は莞爾々々してお初の方に向いた。

「阿母様、あなた大層御心配ぢやが、今の事なら決して御心配をなさる事はない誰が何と云つても此の妓は清淨無垢の處女ぢやからね、そら彼の蓮の花のやうに汚れない美しい體ぢや、好いかね、私が保證をする、私は此の妓の希望と無邪氣な處に感じて、其れを汚れた慾からふみにじるのは罪ぢやと知つたのです、此の妓の事は末までも骨を折るつもりぢやから安心をなさい、宜いかね。」

慙う眞向から云はれたので、お初は頭も上らず淺井の恩誼に感じてうれし泣きに泣いた。

お初は慙くまで云ふ淺井の辯解を諛とは思ひなかつたで、確かに菊枝の貞操は破られないものと信じた、素よりその通りなのであるから、尙更淺井の附加へた言葉のうちには、充分に其の誠が辯解の間に溢れてゐた。

「解つたかね。」と、淺井は稍不安らしい顔つきをしてお初を見た、しかしお初は漸

く安堵した容子を見せて、

「はい能く解りましてございます、何と云ふ御親切なのでございませう、妾からあつくお禮を申します、難有うございます此の御恩はなかく忘れるもんぢやございません。」

「イヤ恩の何のと………那樣事を云はれると却つて私が恥入る譯ぢや、却つて私は此の妓から邪な心の裏切を教へられたも同じ事なのでね、いやはや好い年をして面目次第もないが、若い妓を可愛がるのが、何より私に取つては樂みなものぢやから、はゝゝ。」

恚う云ふ淺井の言葉も、お初には能く耳に入らなかつた、何故と云つたら、折角淺井が此程までにして呉ても、肝腎な姉の舟子が菊枝の廢業を承諾して呉さうもない、さうすれば小さい心を痛めてゐる菊枝の希望も、淺井の親切も、ついでに清太郎や自分の思惑を何の益に立たない事になる、まづ差當つて舟子から承諾をさせなければならぬと、恚事を考へてゐたのであつた。

だが而し淺井は其れを爾とは思はないで、何か自分の云つた事でまだお初の腑に落ない事があるやうに邪推をした。

「まだ安心が行かないかね。」

「いゝえ。」と、お初は稍魔誤つて打消しながら、旦那様の仰有る事は能く解つて居りますが、此れの姉が此れの廢業を喜びませんので………」

「姉と云ふと………はゝあ、舟子かの。」

「え、左様でございます、此れの兄などは些つと身分のある事を勤めて居りますので、自分の名にも係はるから、お前も此の妓にも廢めるやうに云ひましたのでございませうが、なかく聞容れては呉ませんので、妾も申しましたが………」

「うむ。」と、淺井はうなづいて「此の妓からも兄様の事は聞きました、成程舟子は此の妓を看板にしてゐるのぢやらうから、今まやめられたら自分の利益にならんです。」

「ま、爾う申しますので………」



「さうか、イヤ而し其の事なら私も考へませう、さうして何とか舟子と相談をして見ませうよ、だから御安心をなさい、此の妓が折角眞人間らしい思想をもつてゐるのだから、其れを遂げさせて遣らないのは罪ぢや、親としても兄としても寢覺が悪く、譯ぢやね、私も眞負にしてゐる客として甚だ心地が悪い、おもしろくない、何とか相談をして見ませう、な阿母様。」

「難有うございます。」とお初は浅井の眞心に感じて涙々とうれしく思つたのか、最う涙が頬をつたつて流れてゐる。

いつの間にか日は高く上野の森の梢を銀のやうに光らせて、池の蓮の葉は活々と朝の元氣好い化粧を凝らした、恰度、土色をしてゐる水の色は、底の方に美しい金色を流して、錯綜してゐる蓮の根もとは、ぼちや／＼と眞鯉や緋鯉が幾何ともなく脊を摺合はせて泳いでゐる。

池の埋立工事に従事してゐる労働者は足場に乗つて懸聲勇ましく仕事をしてゐるのが、顔廢れて行く江戸の面影に、一層惨な痛ましい感受を與へてゐる。

「最う大分お腹が減つた、御飯を喰べに行きませう、決して遠慮は入りません、一緒に行きませう。」とお初は浅井に強ひられて菊枝と共に、浅井の行く方について行つた。

それと摺違つて、山下の方から歩いて来た倉富子爵は家令の落合をつれてゐた、菊枝は殿を見て何遍か振返つては母親と囁いたので、お初は疑乎と倉富の後姿を立停つて眺めた。

子爵は摺違つたのが舟子の妹とは知つたらうが、目下人をして探させてゐる落胤とは思はなかつたらう、唯、日頃江戸趣味の敗残を痛ましく思ふ心に、發矢とばかり深く心臓を貫かれたのは、不忍池の埋立工事であつた。

「あ、此處にも文明と云ふ巨きな悪魔の手が延びて来た。」と、心の裡で叫ばれた。

### 納 涼

「落合、まだ水田から何とも云つて来ないかの。」と、倉富子爵の殿は、椽の端に置

いてある朝顔の花の、萎びた莖をつまみながら眺めてゐる家令の落合老人に云た。  
落合は掌につまんだ莖を五つ六つ載せた儘に、殿の方に眼を遣つて、

「まだ何とも云つて参りませんが、今日あたりはきつと参る筈でございます。」と、  
重い口調で柔かに云つた。

別に殿は何とも云はないで、軽くなづかれたが、傍に散ばつてゐる新聞を手に  
取つて眺めた。

初秋の水莊はめつきりと秋らしい気分が庭に満ちて来た、池の周圍に誇り顔に咲  
いてゐる草花は、蟲の聲滋く啼く庭を一入ふかく野の趣味に化して、夏から引つ  
いて強烈な色を見せてゐる辛夷の花や、咲かけた紫色の弱々しい桐の花がいかに  
も殿の幢に媚るやうな嬌態をつくつてゐるやうに見えた、樹立繁つてゐる緑蔭に鳴  
いてゐる蟬しぐれの、いつか最う果敢ない命の名残が其の音に籠つて、なやみ深い  
人の胸を痛く搔撈つてゐる。

「落合、水田の入つてゐる新聞社は繪入新聞ぢやの。」と、殿は新聞の上に落してゐ

た眼を落合の方に向けた。

「はい、御意にございます。」

「おもしろい事を企てゝゐる、お臺場を公開して貰つての、彼處で納涼を催させて  
ゐるのは至極好い思ひぢやないか。」

「はい、太平の御世に残つたお臺場が納涼場になるのも時節でございますよ。」

「イヤいろ／＼の意味からお臺場を申ふ事にもなるさ、私の身に取つては懐かしい  
臺場ぢや、そら品川沖に英國の軍艦が来た時に、私は勝安房守の命を奉じて臺場を  
固めに行つた事があつた、あ、もう何十年の昔ぢや、そのお臺場が今ぢや納涼場に  
用ゐられるのも運命ぢやの。」

「御意の通りで……浅猿しうございます。」

「仄かに聞くと、早晚お臺場も、東京灣の築港の犠牲となつて取くづされるさうぢ  
やが、その前に納涼場となつて多くの人を迎へるのも、掉尾の花を飾る事になるの  
ぢやから好からう、武士の最期と同じやうに、花々しい討死ぢや、考へると物の瀾

落ほど歎はしいものはないのう。」  
 「はい。」と、力を罩めて云つた落合の眼には、殿の感慨に同情する熱い涙が浮いてゐた。

サラ／＼と疊障もしとやかに、衣ずれの音が聞えて、高髻に結つた小間遣が殿の傍ちかく来て両手をついた。

「殿様、只今繪入新聞の水田様がお出になりました。ごさいます。」

「さうか、直ぐ此方へ通してお呉れ。」

「畏まりました。ごさいます。」と、小間遣が去ると、間もなく、繪入新聞記者の水田寅雄は、めづらしくも和服の、流行に遅れの身装をして案内されて来た。

「殿様御無沙汰をいたして居りました。」

「能う来て呉たの、今も落合と君の噂をしてゐた處ちやつた、は、は、は、いつも元氣が好くつは何よりだの。」

「はい難有うごさいます、新聞記者は最も頑健を尙びますので、其の點から云ひま

すと、私などは理想的の新聞記者かも知れません。」

「イヤ君などは學と智と才と兼てゐるから絶好の記者ぢやらう。」

「さう仰有られますと汗顔の至に絶えませので……殿様早速でございしますが例の一件でございすね、どうやら一道の曙光を發見いたしました。ごさいます。」

「解つたかの、お玉の姉のゐる處が……。」

「はい。」と、水田は伏目になつて考へたが「まだ確と夫れと云ふ見當はつきませんが、やつぱり東京市中に住んでゐる事は確かでございます、いろ／＼と探索いたさせました處、千束町には居りませんが、どうやら芝の方にあると云ふ話もありますので、其の理由は……と申すとな、何でも伴と云ふのが慶應義塾に入學してゐた事があるさうですから。」

「成程。」と、殿は水田の顔を眺めてうなづいた。

片睡を呑んで子爵と水田の談話を聞いてゐた落合老人は、殿の眉と眉の間に刻まれた不安の雲が、稍吹きとられたのを見て、自分もやうやく安堵したやうにシヨボ

くした眼を光らせた。

「大丈夫のぞみがございますかね、どうですか水田様。」と、落合は氣急しさうに口を切つた。

水田は晴やかに眼を睜つて落合の方を見ながら、

「たしかに望はあります、兎に角、お玉様の姉と云ふ人が東京にゐると云ふ事が解れば其れから夫へ手蔓を求めて行けますし、もう其處にお姫様が育てられてゐる丈けは確かでせう、好んば其處に居らんにしても、其の叔母を責めれば何處にどうしてゐるか云ふ事は解りますから御安心なさい。」

「まあ其の通りぢやが……。」と、殿は句切つて水田の方を眺めたが「しかしの水田君、墮落してゐるやうな事はあるまいの。」

「墮落？」と、水田は我知らず反覆して、

「左様、それまでは私にも解り兼ねますが……。」

「折角探し當ても其の子が墮落をしてゐるやうな事があつては、倉富家の相續人と

する事が出来ないからのう。」

「御意でございます。」と、落合の晴やかな顔が又曇つて来た。

水田は何とも其れを反對する道を即座に見附ける事が出来なかつた、しかし此儘にして置いては子爵を不安の裡に導くばかりで、自分が苦心をして探索してゐる精神にも戻る譯と、恚う強く頭腦に響いて来たので、出鱈目でも子爵の安心するやうに、駢縫して置く事は何よりも殿に取つては慰安である事を思つた。

「殿様、其の邊の御心配は御無用だらうと存じます、此れが下賤の者の胤ではございませんから、母親であるお玉様より……好んばお玉様が遺言をしなかつたに似た處で、祖母なる人から其の叔母様に遺言の取次があるものと想像されますから、きつと大切にして育てゝゐるだらうと思はれますが……。」

「さうかしらんで。」と、殿は尙疑の眼で水田の方を見られながら「其れならば祖母が疾くに私の方に此れ〜であるからと云つて来んならん筈ぢやがの。」

「御意にございます。」と、落合老人は子爵の尻馬に乗つて水田を眺めた。

水田は稍ためらつたが、いかにも自信があるやうな態度で膝を押進めた。

「お言葉を返しては甚だ失禮でございますが、其れは餘り殿様の御推量が過ぎやしないかと存せられまする、先方では御落胤のお姫様は此の子でございますと申上たいのが山々でせうが其處には何かの障害があつて、申上げ兼ねてゐるのではあるまいかと想像されますので、世間には往々さういふ事がございますから……。」

「成程、さう云へばさうかも知れんの。」

「御意でございます。」と、落合は又殿様の云ふ通りに應じた。

水田は思はず落合老人の態度が不得要領なので、可笑しいものからクス／＼と笑つた、殿も其れと察して微笑まれたのであつた。

それで此の談話は少時お互の沈黙の間に梟がついた、子爵は更に眼を繪入新聞の方に注がれた。

「水田、君の新聞で催してゐるお臺場の納涼は何様具合ぢやの。」と、改まつた口調で云つた。

「はい。」と、水田は一度口を噤んでから「なか／＼盛大でございます、或る意味から申ますと、廢れ物になつてゐる臺場を弔ふと云ふ譯にもなりますが、兎に角俊分などは海の中にある丈に誠に涼しくつて、毎晩涼みに出る人で充滿でございます。」

「さうか、其れは結構ぢや、お前などは幕末史を讀んでゐるから知つてゐるぢやらう、彼の臺場と私は深い因縁があるので、何うもお臺場が戀しうてならんよ。」

「御尤もでございます、何なら殿様古戰場を弔ふと云ふ意味で、今晚お伴をいたしませうか、私の商賣からいたしましたしても殿様のお越は誠に面白い記事の一つとなりますのでございます。」

「うむ、ちや今晚行つて見やうかの。」と、子爵は笑顔になつて云つた、水田の顔には云ふべからざる愉快な色が流れて膝を進めた。

「さうでございますか、ちや早速ですが此の事を社の方へ通じて今日の夕刊に掲載いたします、殿様のお越は何よりの廣告になりますから。」

「は／＼、而し恚ういふ老人の髭面ぢや餘り廣告の利き目もあるまいよ。」

水田も笑ひながら「電話を一寸御拜借いたします。」

と、水田は起つて行つた。落合は殿の笑顔に釣られて仍且うれしさうであつた。

「落合、お前は奈何するかい。」

「はい私は今晚お留守居を致します。」

殿は軽くうなづいた。水田は莞爾々々して歸つて来て席についた。

「殿様、社の方でも非常に喜んで居りますので、貴所のお越なさる時間を約束して

芝浦まで自働端艇を迎へに出して置くと云ふ事でございます。」

「自働端艇？イヤ私や彼れは嫌ひだ、あの香と彼の音が大好きぢや、あんな殺風景

なものよりも仍且のんびりとした和船で行かう、船頭の磯節でも聞きながらの。」

「成程それもさうでございますね。」

恚うして雑談をしてゐるうちに、稍日は西に傾いて来た、殿は落合に命じて「重

箱」のうなどんを誂へさせた、水田は久振で名物の重箱を賞翫する事が出来たので

うれしかつた。

「殿様、最うお俣が參つて居りますが………」と、文金の高髻に結つた小間遣が来て三ツ指をついた。

子爵はうなづいて徐に起れたが、着物を着換へると云て自分の部屋へ行つた。

水田は稍しばらく玄關で殿を待つてゐると子爵は薩摩上布に稍派出ではあるが茶

献上の帯を締められて、其の上には紗の五つ紋の羽織を引掛けられて出て来た。

「お召物は？」

と、小間遣ひが訊くと、殿は考へられたが、

「雪駄。」

と、低く云はれた、小間遣ひは八幡黒の鼻緒のついた雪駄を出して丁と敷石の上に

揃へた。

やがて子爵と水田の姿は門外へ見えなくなつたが、落合は凝乎と見送つてゐた。

芝浦へ来るうちに日はどつぷりと沈んで、愛宕山の彼方に夕焼けの色がほんのり

と燃えてゐる、折能く空は澄切つて拭いたやうに碧い、まだよく暮れぬので星の影

は明かには見えないが、頭の眞上に宵の明星が光つてゐる、今や群衆は出盛りのわれを争つてハシケに乗つてゐる、子爵と水田は叮嚀に繪入新聞社員の案内で新しいハシケに乗つてぎい／＼と漕ぎ出した。

潮は心地好く充滿にさしてゐる、たそがれの色は刻一刻に迫つて来て、彼方の臺場は丘のやうに眞黒くなつてゐる間にところ／＼霧を透して見える灯の影がさながら浮彫の繪のやうに其周圍だけをハッキリと見せた、波はゆるくとぶり／＼と舷に碎けて、その飛沫が子爵の着物にまで押冠つたが、殿は凝乎と臺場の方を見詰めてゐた、ゆくハシヤの灯に歸るハシケが入亂れて、其れが群青色をしてゐる海にだけると、金色の鎖を蒔くやうに、舟から舟へ切目なく繋つて、其の美しさはなかく／＼口で云ふ事も出来なかつた。

やがて子爵等一行の集まつたハシケは第三臺場の岸へ横づけにされた、殿は水田の介錯で上へあがられた、さうして繪入新聞社員の案内で一先づ其の休憩所へ入つた。

「お、月が顔を出した。」と、殿は折柄遠く房總の山の彼方より昇つて來た嫦娥の姿を心地よげに眺めた。

海は月光が斜に碎けたので、極彩色の錦繪のやうに美しく水が光つた。

「懐かしいな、何年振ぢやらう、あゝもう五十年になる。」と、殿は傍にゐた水田に云つて無量の感慨に沈まれた。

水田は子爵の胸のうちを想像して何とも慰めやうがなかつた。

子爵の眼にはキラ／＼と涙が雲母のやうに浮いた。

今、過ぎ去つた既往をくりかへすと、親しい友の儂が夢のやうに眼の前にはあらはれて、活き残つてゐる自分を羨むやうな、または自分たちが國のために流した血の跡が、夏の歡樂郷と變り果てた淺猿さを怨むやうな、遣る瀬ない悲しみの面色がまざ／＼と浮んで來たのである。

「私は却つてあんただちが羨ましい、死ぬときに死遅れた爲に私は今かへつて情ない凋落のうき目を見せられてゐる、私だちの戀しい江戸の滅亡はろびゆく武士道の

ゆく末、顔れかゝつた國民の氣分、あんたゝちに見せたいくらゐちや、恚ういふ時代の潮につままれて、私は主義のために死損つた此の體を無慘にも試し斬にされてゐるやうぢや、あんただちは好い時に死なれたねえ。」と、子爵は眼に見える幻影に向つて、心ひそかに叫ばれたのであつたが、傍にゐた水田も誰も其れが氣がつかなくかつた。

恚う心の底に叫ぶと、沖の彼方に靈火のやうに灯つてゐた漁船の火が、一つ、二つ、三つ、四つと、一つづつ消えて波の底に沈んで行くやうにも思はれた。

嫦娥の影は次第に冴えて、碧い海のやうに滑らかな空は、氣も一層爽かな秋の色が充分に流れて、ピカ／＼ピカと自然の謎を囁いてゐたやうな群星が、傍から傍から影をかくして消えてゆく、其れと反對に、ハンケから吐き出される臺場の上の人のいきは、一入熱闘して來た、さうして汗と白粉と磯の香とが混亂して、一種妙な臭が濁つた空氣の間に漂よつてゐる。

「喧嘩だ、喧嘩だ／＼。」と、つゞいて聞えた聲は、程遠くない餘興場の方から、次第にとよめいて來た。

すると、間もなくバタ／＼バタと烈しい地を踏む音が聞えて來た、さうして一人荒い格子縞の、洗ひざらしの浴衣を着た男が、倉富子爵の傍へ馳けて來た。

「どうか後生ですから隠してお呉んなせい、お願ひでございます。」

「水田かくして遣れ。」と、殿は水田に向つて口添をしたので、水田は其の男の肩へ手を掛けて押ながら繪入新聞社の事務所になつてゐる天幕張の中へ押込んだ。

なだれのやうに其の跡から追蒐けて來た群集に交つて、棒などを持つて若い血氣盛りの男が血眼になつてゐた。

「何處へ行きやがつたらう。」と、ひとりが子爵を見ながら立停ると、手拭で向ふ鉢巻をしたのが、

「もしチョン鬚に結つた四十恰好の男が逃げて來やしませんか。」と、威丈高に云つた。

「來た／＼。」と、即座に水田は云つて退けたが「そら向ふへ行く、あ、舟に乗つた



・そら彼處を漕いで行くのがさうだ。」

と、水田は沖へ漕いで行く船頭を見ながら頓智に任せて云つた、群集は皆な其の方へ駈けて行つた。

殿は思ひ出多い臺場の、次第に更けて来る夜の景色に見とれて、時間の經つのも知らぬ程に眺めてゐられたのであつた、沸えたつたやうな熱鬧も稍鎮まつて来た、海から吹いて来る風も一入涼しく袂を拂つて、露がしつとりと蒸れ立つ塵埃をぬらした。

さつきから天幕の内、蚊に喰はれながら入つてゐた男は、どうしたものか姿を見せないで、

「どうしたのか、妙な奴だ。」と、水田は天幕の中へ入つて見ると、卓の蔭で豫備用の天幕を頭から引冠つてグウ〜と高駟を掻いて眠つてゐる。

「のんきな奴だな。」と、水田は天幕を引剥くと漸く眼を覺した。

「最う居やしませんかい。」

「誰もゐないから出て来い。」と、水田は子爵の傍へ行く、とのそり〜と出て来たのは例の假聲屋の豚勤であつた。

「誠に難有うございやした。」と、ヒヨコヒヨコと頭を下げた。

子爵は珍らしくもチョン鬚を乗せてゐるのに氣を取られて眺めた。

「お前は何だい？」と、水田は不思議さうに豚勤を眺めて口を切つた。

豚勤は尙不安らしい眼をして虚呂々々と四邊を眺めまはしてゐたが、稍沈着いた容子で、

「私は假聲屋でございます。」と、おちおちと倉富子爵の顔を見上げた。

水田は讀めたらしい素振をして「成程淺草界限を暴れ廻つてゐる豚勤と云ふのはお前ぢやないか。」

「へい……其の豚勤で……。」

「さうか。」と、水田は一度口を鎖ちて「殿様、此れが由縁會員の一人である脚本家塚本要の兄に當つてゐる男でございます。」

「お、塚本の兄と云ふのは此の男か、私も大月様から聞いてゐたが、此の男が豚勘と云ふのか。」

殿は或る好奇心から豚勘は何のために今でもチョン鬚を頭に乘せてゐるのか、其れを聞いて見たかつた。

「おい、どうしてお前は今でもチョン鬚を切らぬのかね。」

「へい。」と、豚勘は躊躇つてゐたが「別にどうといふ事もございませんが、一寸癩に障つてゐるもんでございますから。」

「何が癩に障るのか？」

「只今の世の中が第一に癩に障りますんで……。」

「うむ成程、世の中のどういふ事が癩に障るのか。」

「あんまり西洋かぶれをしてゐるやがるんが夫が癩に障りまさア、今時の奴等にや最う日本の魂つてもものはございませぬ、皆な混成兒魂なんて、そんな具合ぢや今に大きな戦争が押つ初まつたら、日本は勝つてつこはございませぬ、戦をしてうんと敗

らちつたア奴等の頭に沁み込ませやせう、西洋魂が乗移つてゐるやがるから、日本の物つてえと頭ごなしにけなしやアがつて、何でも彼でも西洋の物つてえと好い氣になつてらア、毛唐人の物が那樣に好きなら毛唐の國へ行きや好いんでア、日本の米を喰つてゐるなら日本人らしい眞似をしてゐりや好いんだ、何でえ、糞面白くもねえ、第一が西洋の芝居なんかを眞似てゐるやがるのが大の癩だ、だから私等が飯の喰あげが出来たんでア。」

「面白い、其れぢやお前の望む處ろはぢやの、日本の芝居を盛んにしやうと云ふのか。」

「え、芝居なんか小つぼけな事なんで……私やね、日本と云ふ神様のお國のためには日本人の魂を失くしたくはねえつもりでございます、旦那たちの前ですが、何も彼も西洋の物ばかりもつて來やがつてさ、日本の品つてえと頭からけなしして丁ひやがるんだ、だから日本はいつまでも西洋に金を絞りと取られて貧乏してゐるんでア、恰度私の商賣のやうなものだ、死んだ成田屋や菊五郎の聲色を喜ばねえで、ペロペ

口の譯の解らねえ毛唐の聲色を喜ぶなんて、芝居の果までが西洋へ金をもつて行かれるんだ、こんな具合で行つて御覽なせい、東京は今に西洋のやうになつて了ひま  
 さア、イヤ現に東京の町は西洋になつて了つた、何處に江戸の面影がごせいます、  
 私や昔の江戸が戀しいんでさア、斯うしてチヨン鬻を乗せてゐるのも江戸と云ふ名  
 所を取つて置きてえと思つてゐるんだ、其の私の……私の……心は今時の奴等  
 にや解らねえ、只今私が逃げて來たのも、若い奴等が此のお臺場の事を頭からけな  
 しやアがつたから、私や癪に障つてならねえんで打擲つて遣つたんです、旦那お察  
 しなすつてお呉んなせい、私は純粹の江戸ッ兒だ、自分の生れた江戸の姿を残して  
 置きてえと思ふのは當り前ぢやございせんか。」と、知らず識らず豚勤の言葉は激  
 越して眼は血走つて來た、さうして止度もなく熱い涙が臉を離れてホロ／＼と膝の  
 上に滾れて來た。  
 子爵は豚勤の云つてゐる事が、自分の胸のうちで思つてゐる事を痛切に云つてゐ  
 るので、自分は胸が痛くなる程であつた、水田は殿の心もちを知つてゐるから、何

とも云ひ慰むる言葉もなく黙つてゐた。  
 「詮方がないの、時代の推移ぢや、此の臺場が見る影もなく取残されたやうに、江  
 戸を戀しがる者は、皆な無慘に取残されて廢れ者となつて朽るのぢやの。」と、子爵  
 も心から泣いて豚勤に同情をした。  
 つかれ切つた汽笛の音が芝浦邊でつゞけ様に響いて、臺場の末路を弔ふやうにも  
 思はれた。

### 花 川 戸

お臺場の納涼から歸つて來た倉富子爵は豚勤を伴ひながら雷門の處まで來た、  
 水田は歸り途に繪入新聞社の方へ寄ると云つて蠣殻町で別れた、殿は豚勤に五圓紙  
 幣を一枚渡して俵賃を拂へと命じた。

「さ、幾らだい、俺の面を見て價踏をしろよ。」と、豚勤は莫迦に景氣好く五圓の紙  
 幣を車夫二人の前へ突つけた。

二人の車夫は互に顔を見合はせて忸怩してゐたが、  
 「親方、誠に相済みませんが、芝浦から此處なんですから一兩二分だけ遣つてお呉んなさい。」

「一圓にしねえな、一貫くらゐは俺の方から祝儀を遣らう、よ此の豚勘の顔を見て物を云はねえと損だよ。」

「宜うございます。」と、年の老つた方が五圓紙幣を受取つて向ふ側のカキ餅屋へ走つて紙幣の兩換をして貰つて来た、豚勘は其のうちから一圓の紙幣を二枚とつて車夫に渡したが、自分の胴巻へ手を入れて十錢の銀貨を二枚つかみ出して添えて遣つた、車夫は不承々に去つて行く。

豚勘はさながら凱歌を擧げたやうに意氣揚々と子爵の傍へ来た。

「旦那、一圓で追拂ひやした、一貫祝儀を遣つたら喜んで行つちめいやがった、へ、へ、へ。」と、残つた三圓の銀貨と紙幣の交つたのを殿の方へ返さうとした。

「お前へ遣る、お小遣にせい。」

「私に……此れを……左様でございますか、誠に難有うございます。」

「しかしの、私はお前が何となく好きぢやから云ふのぢやが、あまり亂暴をしぢや可かんよ、小遣が失くなつたら来るが好い、橋場の倉富と云ふと解るからの。」

「へい、橋場の倉富……？」と、豚勘は殿の顔を眺めたが「もしや華族様の倉富様では……？」

「さうぢや、別に華族様だからと云つて怖がる事はない、平民も華族も人に違ひない、私などは結句平民が好きぢや、好いか、チョン鬚の手前に對してもお前の素行をつゝしまんと可かんよ、私はお前の何處にも惚れやしない、其のチョン鬚に惚れて小遣を達引くのぢやからの、うぬ惚ては可かんよ、お前は死ぬまで其のチョン鬚を切るな、さうして何様に困つても先刻臺場で云つた事を忘れるな、あくまでも江戸ッ子で死ぬ、好いな。」

「へ、へ、畏りましたでございます。」

「何處かお前をつれて飯を喰ひに行かうと思つたが、かへつてお前が窮屈ぢやらう

今日は其のお刺銭で我慢して置け、別れるぞ。」と、子爵は徐に踵を返してぶらりぶらりと花川戸の方へ歩いて行つた。

豚勘はぼんやりと立つて殿の後姿を見送つてゐた、すると、其處へバタ／＼と馳寄つて来たのは、夜豆を賣つてゐる娘のお竹であつた。

「阿父様、何をしてゐるの？」と、横から豚勘の顔を見上げた。

さすがに親子の間柄で、今日も酒の氣もない處から、お竹の肩へ手を掛けて、

「豆を賣つて了つたのか。」

「え、此の通りよ。」と、お竹は空っぽになつた箆を見せてほこり顔である。

豚勘は子爵から貰つた刺銭で、又、自分のお得意にしてゐる神谷の酒場へ行かうと思つたが、殿のしみ／＼と云つた言葉が、何となく荒んだ心の底まで沁み込んだやうに響いて、此の刺銭を一夕の酒食のために遣つて了ふのが惜いやうな氣になつた、其處へ娘のお竹に抱きつかれたので、一層妙な氣分に囚へられた。

「お竹、父はな、今晚うちを明けて又千束町の阿魔の處へ行かうと思つたが、お前

の顔を見て行くのが可厭になつた、此れから公園をぶらついて歸るからな、此のお寶を阿母の處へもつて行きねえ、好いか。」

「此のお寶を？」と、お竹は紙幣と銀貨を豚勘から渡されて、不審さうに父親の顔を見上げた、さうして心のうちで「いつも恚うだと好いんだけど……。」と、ひそかに小さい胸を痛めた。

子爵の意氣に感じて、其の夜の穴入りを思ひ切つた豚勘は、殊勝にも子爵から貰つた金を娘に持たせて、自分は公園まで見送りながら行つた、恰度、娘のお竹と花屋敷の前で別れて自分は六區の方へ足を向けた、何處をうろつくと云ふ目安もないぶらり／＼と肩で風を切つて行くと、草津温泉へ入る細い路次の中から犇と寄添つていかにも鴛鴦のむつまじさうな一組の客と藝妓が、生酔の足もとも危なつかしく蹠跟として出て来た。

「そら危ないよ、そんなに逃げなくつても好いちやないの。」と、女の方から男の傍へ寄つたが男の方は稍迷惑さうな素振が見えた。

豚勘は此の様を見て心ひそかに妬けて溜らなかつた。

「畜生め。」

その吐きが女の耳に入つたか、豚勘の方へ顔を真正面に向けた、ハツと顔と顔が合ふと女の方から又顔を反向けて知らぬ顔に行かうとした。

「よう、誰かと思つたら舟ちやんか、おいおい舟ちやん待ねえな、さうく見せつけるもんぢやねえせ。」

恚う馴々しく出られたので、舟子は逃げる譯にも行かず澁面つくつて立停つた。

「豚勘さん今晚はお断りだよ。」

「何をさ、別に今日はねだつちやわやしねえつやねえか。」と、舟子の、こつてりと

白粉の濃い若づくりの姿を眺めてよ「蓬萊座の色男。」

と、男の肩へ手を置きながら、豚勘は例の傳之助と思つて男の顔を莞爾々と覗き込んだ、すると相手の男は鼻尖であしらひながら、

「違ふよ、人違をしちや困るね。」と、膠もない挨拶であつた。

豚勘は眼を据えて見ると、色の生白い藝人らしい身装は似てゐるが、其れは傳之助ではなかつた。

「や、傳印ちやねえんだな、是れは失敬はてな何處かで見た事があると思つたら、さうだ、お前さんそら喜劇とかの御大將だ何とか云つたね、さうく染の家の五

九郎先生だ、おい舟ちやん最う傳印はお廢めの、牛を馬に乗換へたのかい。」

「どうだか知らないよ、そんな事はお前さんの知つた事ぢやないぢやないか。」

「はい入らざる事を申しましたね。」と、豚勘は頬べたを故意と掌で打つてね「五九郎先生、一ツ私もお伴を願はれませんかね、相手が假聲やなんですから又、先生の聲色を演らして貰ひやせう、如何さまで、へへへへ。」

舟子は五九郎と何やら囁いてゐるが、五九郎は紙入から一圓紙幣を二枚ばかり抜いて豚勘の方を向いた。

「今晚はね、一寸用があるんだから、一緒に御飯でも喰べに行きたいんだけども那樣都合だから勘辨して呉んねえ、此はね、甚だ輕少だがほんの今晚の酒代さ、收め

て置いて呉んねえ。」と、豚勘の前へ差出したので、豚勘はそれを手に取りながら、「恐れ入りやしたね、そんな事をして頂きましてはね、ちや遠慮なしに頂いて置きませう、舟ちやんお前さんからも宜しくね、へへへ、親方お前さんの評判が莫迦に宜うがすせ。」

「お蔭さまで難有う。」

憚う云つて染の家の五九郎と舟子はさつさと急ぎ足で公園の植込の中へ歩いて行つた、豚勘は此れを凝乎と見送つてゐたが、

「へん、馬の脚め、舟子も舟子だ、物好きにも程のあつたもんな、あんな獸物を咬へ込んで何が好いんだ。」と、ひとり呟きながら、千束町の方へ曲つて行つた。

植込の中から豚勘の行衛を見てゐた五九郎と舟子は漸く安心をしたやうに、

「飛んでもない奴に見附かつたもんなね。」と、五九郎が口を切つて舟子の顔を覗いた。

舟子は澄したもんで、けろりとしてゐたが、

「さ、行きませう、待合さんちや人目が煩さいから、そら話をした花川戸のお友達の家へ行きませう、ね。」

舟子と喜劇師の五九郎は話をしながら、被官稻荷の前を通り抜けて「周易判断」の看板の見える細い路次を通抜けて馬道の通へ出た、それから急いで又細い路次へ入つて暗い處を二三度ばかり曲り曲つて、やつと花川戸の往來へ出やうと云ふ路次へ蒐つた。

恰度、倉富子爵は徒歩で、何を漁るともなくぶら／＼と電車路の、賑やかな通りへ出やうと思つて、抜け裏へ足を踏入れると、バツタリ出會つたのは舟子らしく見えただので、

「舟子ぢやないか。」と、優しく聲を掛けた。

ハツと思つて立停つた舟子は、よもや恁麼處で子爵に聲を掛られるとは思はないから、

「何方？」と、瞳を据えて見ると其れは倉富子爵であつたので「あら殿様。」

と、奈何にもうれしさうな容子を見せて傍へ寄つて行つた。  
五九郎は大事の客と思つたものか、故意と急ぎ足で花川戸の通へ急いで姿を隠して了つた。

「やつぱり舟子ぢやの、何處へ行くのか？」

「お客様を送つて……ちつき其處まで……」

「さうか、ぢや又會はふ。」と、子爵は別に氣にも止めないで、別れやうとしたが舟子は何だか子爵に摘み喰の現場でも見附けられたやうな氣になつて、稍不安でならなかつた。

「お殿様。」

「何か。」と、子爵は又立停つて振返つた。

舟子は稍もぢくしながら「あの……此れから何方へいらつしやいますの？」

「邸へ歸るのぢや。」

「さう。」と、舟子は句切つて考へながら「妾お送り申ませうか。」

「送つて貰ふのはうれしいがお前には客があるのぢやらう。」

「いゝえ、ちつとも構はないお客様なの。」

「客を怒らせては可かんよ、私に構はずに送つて行け。」

「あら。」と、舟子は滾れる許りの羞を充分に見せて「殿様、そんな事を仰有つて……」

……あんな客はどうでも好いんですの。」

「蔭ぢや私もさう云はれる口ぢやらう。」

「憎らしい。」と、舟子は袴と子爵に寄添つて殿の二の腕を抓つた。

子爵は色氣のある舟子の仕打に、云ひ知れぬ興を覺えて、さびしさの、妙な氣を

唆られて若い華やかな氣分が湧いて來た。

「ね殿様、妾に是非送らせせ頂戴な。」

「好し、先方のお客様さへ構はんのなら一緒に行かう。」

「ぢや待つてゐて頂戴。」と、舟子は路次を抜けて花川戸の往來へ出たが、ぼんやりと寂しさうに待つてゐる五九郎の方へ走つて來た。



「濟ないがね、一寸、今晚は止ませう、妾、今のお客様を送つて行つて来るから。」

「何の事つた、つまらねえ。」

「好いぢやないの、たまにはさ、妾の大事の——お客様なのよ、そら橋場の殿様ぢやありませんか、ね今晚は一寸妾に謀叛があるんだから、考へて御覽なさい、お互に樂まうと思つたら、軍用金が入るぢやないの、解つたでせう。」

「はい——どつさりとお樂みなさい。」

「可厭ね、そんな嫌味は云ひつこなしさ。」

「だから行つていらつしやい。」

「怒つちや可厭よ、又、明日の晩にね、何なら今晚、そらさつきまでめた鶴家さんに行つていらつしやい、妾、用が濟んだら、彼處まで歸つて行くかも知れないからさ、ね。」

恚う云つて舟子は再び走つて路次の中へ妾を消した。此れを見送つた五九郎はボカンとして眼を大きく睜つてゐたか、

「莫迦々々しい、彼奴の心が解らないや。」と、つぶやいた、舟子の心のうちでは、若し五九郎が怒つたら怒つた時の事、其れ程に好きな藝人でもなし、一寸評判に釣られて買つて見た丈の事である他に幾らも好い藝人はあると多寡を括つたのであつた、さうして唯必要なのは金、その金の保護者を大事にするのが何よりと思つて子爵の方へ乗換る氣になつたのであつた。

「お殿様、お待遠様、さ御一緒に参りませう。」と、舟子はハア——息をはづませながら寄つて來た。

「馬道の通を行かうかの。」と、子爵は舟子の方を見ながら口を切ると、舟子は何か話さうとしては躊躇つてゐる容子であつたで、けろりとして子爵の方を眺めた。

「花川戸の方を行きませう、馬道の通は賑やかで、明るくつて可けないわ、さうでせう殿様、妾は構はないけども、お殿様は妾のやうなものと連れ立つていらつしつてはね。」

「イヤ私も構はんさ、何にも華族だからと云つて藝妓をつれて歩けないと云ふ法は

あるまい、子爵だから藝妓と往來を歩く事は出来んと云ふ事はなからう。」  
 「でも……。」と、舟子は殿の顔を見成つて俯向きながら「世間の人は妾たちを醜業婦だつて云つてゐますから。」

「は、は、口は調法なもんさ、藝妓を醜業婦と笑つてゐる世間の代表者、と云ふと難かしいが、ヤレ貴婦人とか何とか云ふ手合は奈何だ、陰で狐鼠々と藝妓にも劣つた事をしてゐる、此れからの那樣人たちがお前たちを醜業婦なんて云つたらお手許拜見と云つて遣れ、無暗矢鱈に西洋熱に浮かされてヤレ此れが陳腐だの、ヤレ此れが新しいのと、片端から日本の風俗も因襲も打毀してうれしがつてゐる、そんな者が良妻賢母の資格があるもんか、その意味から私などは藝妓の、昔と變らぬ張と意地を嬉しく思ふ、お前たちの仲間の義理堅い事をうれしく感ずる私はお前に勧めがの、人が古いと云つて笑つても構はん、江戸の藝妓の眞似をしる、歌麿の書いたやうな姿の藝妓が見たい、江戸錦繪にあるやうな風をして座敷へ出て見い、どんなに奥床しいか、其處に藝妓と云ふ客を喜ばせる本統の柔かい趣味が出ると云ふも

のぢや、どう思ふかの。」

舟子は譯が解らぬながらに、子爵の云ふ事が多少理解が出来た、源之助の扮した昔の藝妓の、雪のやうな白い素足に、黒塗の、二枚齒の下駄を穿いた、三枚比叢の稍下目に結んだ白献上の帯を猫ぢやらしに長く垂した恰好、見た目は何となく柔やかで意氣で、那樣風が自分も曾てして見たいとは、古い芝居を見る度毎に思ふ、殊に此の間、宮戸座で、梅曆を観た時に、仇吉と米八の姿を見て無暗にあんな風がして見たかつた、子爵は其れを云ふのだと覺束ながらに爾う思つた。

「ね殿様、そら小三のやうな風をしたら宜うござんすか。」

「小三？」と、子爵は考へてうなづきながら「さうく好からう、すると差詰私此の白髪頭を染めて白粉でも塗つて皺をかくして金五郎にならうかの。」

「お殿様が金五郎。」と、舟子は思はず失笑して腹を抱えた、其處へ走つて來た俣夫が、突慥貪に「危ねえ。」と、叫んだ、子爵は矢庭に舟子を後から抱止めたから舟子は轉びもせず、怪我もせず済んだ、

「殿様、難有う。」

「どうぢや、私の金五郎ぢや役不足かの。」

「だつて……華族様の金五郎は……。」

「は、ちや唐琴屋の丹次郎にしやうかの、此れならちつと役不足でも納まるだらう、差詰、お前は仇吉か。」

「え、妾、仇吉よ、お殿様は丹次郎、お半長右衛門見たいでございますわね。」

「成程、イヤ世は大正ぢやから好からう。」

「其れもさうでございますわね。」

「慥然他愛もない事を話をしながら、子爵と舟子は暗い路次を入つて花川戸の、狭

い薄暗い人通の少い處へ来た。

「花川戸？」と、子爵は兩側の家を眺めて「大分此の邊も變つたの。」

「え、一日々々と新しい家が建つて古い家は取拂ひになつちまうのですもの。」と、

舟子は何の氣もなく云つた。

子爵はしばらく黙つて口籠つてゐたが、眼をしばたいて、

「花川戸！何と云ふ優しい柔やかに響く字ぢやらう、ゆかりの色の紫の鉢巻を締めた助六の昔が思出されるの。」

「え、恚う云ふ恰好をして傘をもつてゐる助六の姿、宜うござんすわね。」と、舟子は無邪氣に身振をして見せた。

子爵の顔にはうれしさうな色が流れた。

雑談をしながらいつか子爵と舟子は、今戸橋の際まで来た、しばらく舟子は子爵の顔を覗いて何か話かけさうな容子であつたが、かすかに太息をついて躊躇つてゐた。

「そら危ねえ。」と、威勢の好い懸聲をして一臺の俵が、二人に摺違つて駛つて行くふと舟子は車上の主と顔を見合はせて、呀と云つたがもう俵は五六間も向ふへ行つた、車の主も振り返りながら其儘行つて了つた。

「誰ぢや。」と、子爵は舟子の顔を覗いた。

舟子は眼を光らせながら「妾の兄でございます。」

と、子爵の顔を覗いた、子爵はうなづきながら、

「銀行の支配人をしてゐると云ふ人ぢやの。」

「え。」と、舟子は即座に答へた。

また二人の間に話は切れた、舟子は思ひ切つたやうに子爵の方へ向いた。

「ね殿様。」

「何か。」

「妾、お殿様にお願ひがございますの。」

「お前の願ひ？」と、子爵は稍笑顔になつて口を噤んでから、改めた口調で「どんな

事でも聞かんならんう。」

「どんな事でも聞いて下さつて？」

「あ。」

「さう、妾ね、兄様を救はんならん事がございますの。」

「うむ、どうしたのかい、兄様が……。」と、子爵の眼が光つた。

舟子はさすがに嘘をつくのであるから、稍ためらつたが、もとより企んだ事なので、臆面もなく子爵の方へ寄つて。

「あの……兄かね、ちつと慾に迷つて相場に手を出しましたんですの、さうすると、馴れない事ですから、とうとう棒を折つて了つたんですわ、意気地がございませんわね。」

「成程。」と、子爵はうなづいて口を閉ぢた。

舟子は一層眞面目に「殿様、さうして兄は其れを埋合せするために、あの、銀行のお金をつかつたんでございますよ、詮方がございませんわね、さうして頭取に知れたんですつて、だけでも、永い間つとめてゐたんですから、つかつたお金の半分でも拵えたら、内済にすると云ふ事になつてゐるんです、妾、二百圓丈拵えて兄を助ける約束をしましたんですが不景氣なんでも、誰もお客様が貸して下さらないんですわ、奈何したら好いでせう。」

「さ。」と、子爵は躊躇をしながら「二百圓だけお前が拵えるのか。」

「え、たつた一人の兄ですから、どうかして妾たちの手でも出来る事なら、名前に疵のつかないやうにして遣りたいと思つてゐるんでございますわ。」

「で、私にどうかして呉れと云ふのぢやの。」

「え、そんな事を厚かましくお願が出来ないんですけども……他にお願する方がないですから。」

「好し、私か二百圓拵えて遣らう。」

「お殿様、あの……全く……。」と、舟子はいかにもうれしそうに子爵の顔を凝乎と眺めた。

「安心をしろ、私も縁あつてお前と慍うした關係になつてゐるのぢや、其れくらの金で、お前が兄弟の難義を救ふ事が出来るのなら、私は決してそれくらの金は惜みはしないよ、好いかい。」

「難有うございます、此の事を兄に話をしましたら、どんなに兄は喜ぶ事でせう、

お殿様の御恩は決して忘れませんわ。」

「此れしきの事で恩も糸瓜もあるもんか。」

子爵は更に舟子の心を疑はない、舟子は私かに企んだ野心が成就したので、内心ではたとへ難いうれしさが身内の血を沸かした。

慍うしてゐるうちに、舟子と子爵の二人は橋場の水荘の門前まで来た。

「あら、もうお邸まで参りましたわ。」

「どうする、今晚かへるか、其れとも邸に泊つて行くかの、金は明日でも銀行へ取りに行くが好い。」

舟子は考へてゐたが「殿様、妾、今晚お邸へお邪魔をしても宜うござんすか。」

「あ、好いとも遠慮は入らんさ。」

二人の姿は門内へ消えた。

## 落 籍

しんみりと唯二人、さしたりさゝれたりして杯の遣取に、世間話の花が咲いて、最う話の種もつきた頃、

「時に舟子。」と、改まつた調子で云つたのは、平素からテカ／＼光る鼻尖を、一層脂と汗に光らせてゐる浅井老人であつた。

金口の煙管に莨をつめて火をつけた舟子は何気なく浅井の方を眺めて、

「あら旦那、莫迦に改まつて……じうしたんです。」

「うむ。」と、浅井は稍苦い顔をしてくづしてゐた膝を直して丁と坐つた。

舟子はその態度を見て妙に氣を引つけられた、さうして何だらうと云ふ疑がムラ／＼と頭腦に湧いて來た。

「どんな事なんです？」

「實はの、菊枝の事さ。」

舟子は漸く讀めた顔をして「菊ちゃんがどうかいたしましたして？」

「イヤ別に……。」と、浅井は句切つて「他の事でもないが、彼の妓を落籍して遣らうかと思つてな。」

「まあ……貴所が……。」と、舟子は珍らしさうな顔つきをして浅井を眺めた。

浅井は「貴所が？」と、妙に舟子が疑の容子で自内を見たので、何だか侮辱でもされたものと思つたのか、稍顔色を變へた。

「私が落籍すに異存でもあるのか。」

「別に異存なんて……。」

「あるなら有ると今此處で云つてお呉れ、話がつきかゝつてから、跡で愚圖愚圖お互に陰で兎や角いふのは好くないからの。」

「旦那。」と、舟子は腫を据えてちつと浅井を真摯に眺めて、全く貴所は彼の妓を落籍すおつもりなんですか。」

「實際さ、どうせ私の手に掛けた妓だから他の人に遣るのは惜いからの、何なら私

が一人で未始終手活の花にして眺めたいと思ふのぢや。」

「さうでございますか、解りましたわ、さういふ事なら妾も手離しつないとも限りませんですけども、何しろ彼の妓のからだには此れまでに大したお寶がかかつてゐるんですからね、其れさへ御承知下されば……妾の方は……。」

「成程。」と、浅井は軽くうなづいて「ぢや金の問題次第で菊枝のからだは私の方へ引渡して呉るんだの。」

「まあ、露骨して申ましたらね、さういふ事になりますんですけども……お寶も一寸高過ぎますから。」

「一體いくらくらゐの金で手離して呉るんだい。」

「さ。」と、舟子は考へた。

浅井は膝を進ませながら片唾を呑んで舟子の返辭を待つてゐた。

しかし舟子は煩ふ風が見えて、何とも口を切らない、浅井はもどかしくなつて来た。

「幾らのお寶かい？」

「旦那。」と、やつと舟子は口火を切つて「吃驚なすつちや可けませんよ、細かな處は只今直ぐ申上げられませんが、ざつと一箱くらゐはね。」

「千圓かい？」

「いゝえ。」

「一萬圓？」

「え。」

「一萬圓を出せば好いのか。」

「まあ、それなら妾も我慢をしましてお手許へ差上げますけども……其れでない彼の妓は妾の傍を離す事は出来ないんですもの。」

「舟子、あんまり阿漕な事を云つては可けないよ、お前の妹ぢやないか、何だね、お前は私にならん話をしてゐるんだらう、一萬圓とは出来ない話といふもんだ。」

「いゝえ、全く其れ丈けのお寶を頂かないと手離せませんのでございます、彼の妓

なんか此れからが花も實もございませぬ身の上なんですから、只今貴所のお手許へ差上げましたら全く蕾の中に可惜花の盛りを人の處で咲かすやうなものですからね、どうかさうお思召まして……。」

憚う云つた舟子の眼には決心の臍を固めた強い閃が浮いてゐる。

恰度、淺井が何か云はふうとした時、トン／＼と鞦韆高く段梯子を踏んで座敷へ入つて來たのは、女中のお蝶であつた。

「舟子さん一寸お電話。」

「あらさう、何處から？」と、舟子は首を傾げてお蝶の方を顧みた。

お蝶はけろりとした顔をして「さ、何處からですか。」

舟子はうなづいて淺井に軽い會釋をしながら徐に起つて行つた。

お蝶は其れを見送つてから、稍聲をひそめて、

「旦那、菊ちやんが來て待つてますが、どういたしませう。」と、床しさうに訊た。

「さうか、もうしばらく待たせて置いて呉れ。」

「畏まりましたございます。」

淺井は考へれば考へる程、菊枝が氣の毒で溜らなかつた、母親のお初にも堅く約束をしたが、舟子が彼の態度では、容易に菊枝の廢業は實行が出来ない、まだ會つた事はないが兄の清太郎よりも手紙で宜しく頼んで來てゐる、何と云つて此の始末を報告しやう、餘り自分の男が立たない事になる、其れかと云つて一萬圓の金を出して菊枝を廢業させると云ふ事は、自分の慾以外に餘りに高い犠牲であると、根が義理づくの行懸りであるから底に水臭い考へも出て來るのであつた、こんな事を考へてゐると、舟子は足早に段梯子を上つて座敷へ入つて來た。

「解つて？」と、お蝶は舟子の方を見て口を切ると、舟子は無暗にうれしいやうな素振をして、

「難有う。」と、句切つてから「旦那、誠に濟みませんが、お約束のお座敷から催促して來たんですが、一寸遣つて頂けないでせうかしら。」

「お約束の座敷なら無理に引止める事も出来ないの、行つて來るが好からう。」



「さうですか、ちや誠に濟みませんが……若し向ふの座敷が明きましたら、直ぐもどつて参ります。」と、舟子は莞爾莞爾しながら座敷を出て行つた。

舟子の鞆音が段梯子の下に消えて了ふと、だしぬけに廊下から入つて来たのは菊枝で、最う充滿眼は涙が溢れて、今にも泣き出しさうな顔をしてゐた。

「あら菊ちやんどうして？」と、お蝶は矢庭に訊くと、口を利くのも可厭さうに俯向いて了つた。

浅井は其れと直覺をした、さうして何と云つて菊枝を慰めたら好いのか、突嗟に好い思案もつかなかつた。

「菊ちやん奈何したの、可笑な妓だわね、別に旦那と舟子さんが奈何と云ふ譯ぢやないぢやないか、旦那、きつと氣を廻して焼いてゐるんですよ。」と、お蝶は何にも知らないので、慙う云ふ風に邪推をした、此れを云はれるにつけて浅井は菊枝の心の裡を察して見ると、悲しくなつて来て自分も泣きたくなつて来た。

突然に座敷の外に仕掛けてあつた鈴がけた、ましく鳴つた、お蝶は帳場で呼んで

ゐるので、會釋をしながら下りて行つた。

「菊枝、お前、今私が姉さんと話をしてみたのを聞いたのか。」

「え。」

「困つたのう。」

「妾、どうしても廢められないのでせうかしら？」

「イヤ那樣に氣を落さなくつても好い、また何とか工夫をして見やう、私がお前の兄様や阿母様から頼まれた義理でも、何とかしないと私の義務が濟まん、あゝ何んで舟子はあんなに愆な事を云ふのぢやらう、妹が可愛いと思つたら、あんな因業な事を云はないで、千圓とか二千圓とか話の出来る範圍で云つて呉れると好いのぢやの。」

此の時、お蝶はバタ／＼と鞆音荒つぽく上つて来て座敷へ顔を出すなり、

「旦那、菊ちやんの阿母様が見えましたが、此處へ上ましても宜うございますか。」と、浅井の顔色を窺つた。

やがて母親のお初はお蝶の案内で座敷へ入つて来た、さすがに氣がとがめたものか、閨際へ座つて忸怩してゐた。

「さ、阿母様此方へお入り。」と、浅井は笑顔をして迎へた、慙う云はれたのでお初は稍膝を進めた。

「先日は誠に失禮をいたしました。ごさいます此れの兄からも宜しく申しまして……」と、お初は菊枝の方を顧みて云つた、お蝶はお初と菊枝を見比べるやうにして起つて行つた。

浅井は今宵の首尾が宜くないので、何となく面羞いやうな氣がしてならないものから、澁面をつくつて躊躇つてゐる。

お初も遠慮氣味に口を噤んで何にも云はなかつた、しばらく三人は顔を互に偷み見るやうにして無言であつた。

「ね、阿母様、さつそくぢやが此の妓の事を舟子に相談をしましたがな、どうも舟子はなか／＼片意地な事を云ふので困つたのですよ。」と、やつと浅井は口を切つて

お初の顔を覗いた。

お初の顔は遽かに變つて眼が異様に光つたが、おのづと膝が進んで来た。

「おふねが何を申ましてございます。」

「方外な事を云ふのでね、私も手古摺形さ、は、は、は、もつと奈何にかして呉ると話も纏まるのぢやけれどもね。」

「方外？」と、お初は句切つて「どんな事を申しましたので……。」

と、浅井の顔を疑懼の眼で眺めた、浅井はさながら困り果てたといふ風で、「一萬圓を出したらといふのでね、あまり價が張るから私も實を云ふと二の足を踏んでゐるので……。」と、大きな手で顔を押へて俯向いた。

お初は「一萬圓」と云ふ事を聞いて、餘りに舟子が慾張り過てゐるのに驚いて了つた、自分からは、まだ舟子に向つて菊枝のお菊の素性を云つてない、舟子は仍且自分の妹と信じてゐる、其の血を分けた妹を手離すに、そんな莫大な金を要求するとは、若し此れが叔母の娘で、自分には姪に當つてゐると云ふ事が解つたら、どん

ら阿漕な事を云ふか、滅多にお菊の身の上も話されないと深く感じた、而し斯うなつて来ると折角菊枝が一日々々と指を折つて楽しんでゐた廢業も、茲で一先づ腰を折られる事になるので、其の心根を察すると全く悲しくなつて来て泣くまいと思つても泣かすにはゐられなかつた。

恚う思つてひそかに菊枝の方を見ると最う眼を泣き腫してゐる、お初は一層悲しくなつて自分も拭く間もなく涙がポロポロと滾れて来るのであつた。

「詮方がない阿母様かうしやうかの、私も此の妓の兄様と約束したのだから、今更引込む譯にも行かん、兎に角、私の志丈けはお前さんや此の妓の兄様に見せたい恚うして下さい、恰度今晚私は二千圓の金を持つて来てゐるからね、此の金を資本にして親引と云ふやうな具合に、兄様なりお前さんから舟子に懸合つて下さらんかの、他人の口より云ふよりも、金を眼の前へつきつけて親なり兄なりが云つたら、いかな舟子でも我を折つて了はんとも限らんさ、ね奈何ですか。」と、浅井は懐中から紙入を取出して其處に入つてゐた百圓の紙幣を二十枚抜き取つた、さうして切

れるやうな紙幣をお初の前へ押遣つた。

お初は浅井の真心には感謝せずにはゐられなかつた、心の底からうれし涙が滾れた其れと同時に、腹を痛めた娘の舟子が因業な出方が奈何にも憎らしく口惜しく感じられて溜らなかつた、髻の毛を取つて引摺り廻して遣りたいやうな氣もした。

「ね、奈何ですか、阿母様、さうして私の男を立て、下さらんかの、其れでないと私も誠に寢覺が悪いのぢや、どうかさうして下さい。」

「は、はい……何にも申ません難有うございます。」と、お初は感極つて其儘疊の上へ泣倒れて了つた、母の泣聲を聞かされた菊枝は胸を刺されたやうに感じて誘はれながらシクシク泣いた。

浅井は何と云つて慰めて好いか兎角の言葉もない。

お初が房の家の二階で浅井老人に會つた翌る日の午後であつた、清太郎は委しく舟子の因業な事を聞いて非常に憤慨をしたが、此ればかりは兄の權威で無暗に屈伏させる事も出来ないもので、どうしたものであらうと頭を痛めてゐた。

すると其處へぶらりと入つて來たのは豚勘の弟の塚本要であつた。  
 「留守ですか。」と、要は玄關に出迎へた母親お初に問ふた、お初はしとやかに會釋をして、

「居りますからお入んなさいませよ、ひとりで寂しがつて居りますんですよ。」と、句切つてから奥の方へ顔を向けて、「清太郎や要さんがいらしたよ。」

「あ、さうですか。」と、清太郎は起つて玄關へ來やうとすると、最う要は清太郎の部屋になつてゐる座敷へ入つて來た。

「おう能く來たな。」と、清太郎は出合頭に聲を掛た、要は愛憎よく莞爾々々として、

「橋場まで行つたもんだから……留守かと思つたけれども寄つて見たのさ。」

「さうか、實は出掛やうと思つて……今日はちつと早く退いて來たんだ。」

「何處へ行くんだ。」

「おふねの處へ行かうと思つてね。」

「さう。」と、要は句切つたが「ふねちゃんつて云へばね、近頃大層橋場の殿様に可

愛がられてゐるやうだ、つまりあんな江戸式な氣分の藝妓が好きなんだからねふねちゃんもなかく利巧だ、殿様の氣に入るやうに、身装なんかすつくり江戸式のものも調へて行くさうだからな。」

「成程、さういふ事をするから金が費るんだらう、けれども、現在、妹の廢業まで邪魔して贅澤な事をしなくつても好き相なもんだがな、實に困つた奴だ。」

「妹の廢業と云ふと菊ちゃんのかね。」と、要は清太郎の顔を窺つた、清太郎は眉の間に八の字を描いて、

「君の意見通り一日も早く妹たちの廢業を希望する餘り、いろ／＼と懸合つてゐるんだがね、どうしても駄々を捏ねて聞かないのさ、一萬圓出せば菊枝の廢業を承諾するなんて云ふんだからな、言語道斷だよ。」

「しかし借金と人權問題とは別ぢやないか、君が妹を廢業させるんだもの、菊ちゃんさへ廢めるつもりなら、いつでも廢められるんぢやないか、所謂自由廢業だね。」

「自由廢業。」と、清太郎は口の中で呟いたが「まさか兄妹同士で顔を赤らめ合ふの

も可厭だし、其れかと云つてあんな無情な事を云ふと妹でも打のめして遣りたいやうな気がするよ。」

「談判をして見たら奈何だい、君が兄となつて強抗にさ。」

「さ、其れで行かうと思つてゐるんだ。」

「遣り給へ、僕で好いのなら、僕でも談判をして遣る、唯、僕が行くとね、一寸困る事があるんだ。」

「どうして困るんだ？」

「實はね、ふねちやんから僕が一寸言づけを聞いてゐる事があるから、僕はその誘惑に乗ると自然其方の談判もね……。」

清太郎は直ぐ其の誘惑なるものを推量したのであつた、其れは曾て清太郎が要の口からおふねの舟子が、要に懸想をして女の方から口説き立てた事があるけれども舟子の氣にして見ると、唯、もう俳優や藝人を喰つて見るやうな氣分で交はられるのが可厭だと云つて逃げた事がある事を聞いた、で又此處で其れを繰返されるのが

可厭さに云ふのかも知れんと云ふ風に直覺されたのである、しかし舟子が果して要に懸想をしてゐるのが事實とすれば、あんな女の常として惚れてゐる男の云ふ事を或る程度まで用ゐるかも知れない、さうだ、友達甲斐に慙う云ふ策戦を取つて進む方が安全だと清太郎は思つた。

で、慙うくと清太郎は要に自分の肚を云つて頼んで見た、要は凝乎と考へてゐたが、

「人生意氣に感ずだね。」

と、莞爾として、

「僕、一つ自分の心を犠牲として遣附けやう、脚本家自ら登場俳優となつて芝居を遣つて見やうぢやないか。」

と、明るい眼をして清太郎を眺めた。

\* \* \* \* \*

「どうも困つたな、其れ丈けの金がないと私の位置が保てないんだからね。」と、哀訴をするやうに、媚た眼つきをして相手の舟子を眺めたのは、喜劇師の染の家五九郎である。

舟子は眼を遠く晴れ渡つた空に遣つてぼう／＼と哀の煙を吐いてゐたが、五九郎の何遍も繰返してゐる金の無心を上つ調子で聞いてゐる、しかし五九郎の執念さは恚廢事ではなかく止まなかつた。

「ね、舟ちやん何とかお前さんの力でならないものかしら。」

「お寶を？」

「さう、ほんのちつとなんだがね、夏の不景氣をやつと泳いで來てゐるんだから私の手ちや荷が重過るのさ。」

「妾の方も其の通り、借金で首が廻らないんだもの。」と、飽までも舟子の態度は冷やかで、てんで其の相談には乗らないのであつた。

五九郎はいら／＼して來たが、頭から舟子に強ひる事も出來ず、何とか其の虚に

乗じて此の無心を成功させやうと焦思つてゐると、ガラ／＼と格子の啓く音が聞えた。

「御免なさい。」

「何方？」と、舟子は奥から應へて、

「婆やお客様だよ。」

しかし生憎勝手の方には婆やお道が留守らしかつたので、何の返辭もない。

「舟ちやんゐるんですか。」

と、訪ふて來た客、例の塚本要が爽かな聲で云つた、舟子は其の聲に覺があると見えて、矢庭に起つて玄關へ來た。

「あら。」と、舟子はいかにも意外さうに頓狂に云つて、

「塚本さん奈何して……あアお上んなさいよ。」

「お客様はゐないの？」

「構はない人よ、さアお上んなさいよ、本統に珍らしいわね、門口を間違つて來た

んちやない。」

「戯談を云つて……言傳を聞いたから今日は思切つて遣つて来たんです。」

「さう、うれしいわね。」

と、舟子は先に立つて要を奥の座敷へつれて来た、此れを見た五九郎は愈今日は無心も不成功と思つたか腰を浮かした。

「ちや舟ちやん私はお暇をしやう、今云つたやうな仕儀だから考へて置いてね。」

「あ、好いわ、考へて置くわ。」

「左様なら。」

と、五九郎は癪に障るけれどもつとめて其れを隠して顔にも出さず出て行つた、

格子の締まる音が稍手荒かつた。

「ふん巫山戯てるよ、二度や二度遊んだからと云つて直ぐあんな事を云つて来るんだもの、随分面の皮が厚いわね。」

「誰ですか。」

と、要に巻簾に火をつけながら舟子の顔を眺めた。

「つまらない人なの、ほんとうに三下藝人は圖圖しいのね。」

此處へ婆やお道が歸つて来た、舟子はベバミントと洋食を誂えに遣つた、さうして浮世噺をして約一時間半も二人は笑つて話をしてゐた、舟子は何となく今日は嬉しさうである、それ次に互に汲み汲まれつ飲んだ洋酒の酔が顔に出て来て、ほんのりと櫻色に美しく彩られた。

「ね塚本様、だけでも随分貴所も酷いわよ、いつから言傳をしてゐるか知つてゐて？」

「さ、僕だつて急がしい體だからね、其れに慙う云ふ貧乏人は藝妓遊びするなんて第一僭上過るし。」

「かくしても駄目よ、妾、ちやんと聞いてゐますわ、あの人と別れたんですか、そら柳橋の……ね貴所脚本とかにも書いたぢやないの知つてよ。」

「戯談を云つて……。」

「まだ隠してゐるのね、憎らしい。」と、舟子は尻目に要を睨んで膝を抓つた。要は莞爾々々しながら懐中時計を取出して眺めたが、庭の方へ眼を遣つて、

「莫迦に日が短くなりましたね。」

と、何か考へてゐる容子、舟子は凝乎と要の凜とした處に女のやうに優しさのあつた態度を恍惚と眺めてゐたが、

「こんな男は藝人にも滅多にない。」

と、心の底で思つた。

いつか最う日が落ちて来た。

## 河岸の灯

蕭やかな秋雨の、やゝ小歇になつた川端を、おぼろげな街頭の灯に泥濘を避けて歩いてゐる二人、いかにも睦まじげに藪と寄添つて行く。

「畜生、溜らねえな。」と、酔漢が摺違ひ様に臭い息をついて毒口を利いたが、ほ、

は、と女の方は聲高く笑つて男の顔を意味ありさうに覗いた。

紛れもなく淺本要と清井筒の舟子で、何處へ行くのか、千鳥足の、足許も臻つて危つかしい歩きやうだ。

「ね塚本様、今戸の兄様だつて眞逆貴所と妾とこんな譯合にならうとは思つてゐないでせうね。」

「さうね、僕は何だか氣がとがめてならないよ、いかにも君を誘惑してゐるやうで……。」

「あゝら可厭ね、貴所が妾をどうかして……別に貴所が妾を欺さうの何のと那樣事がないぢやないの。」

「けれども僕と君と恚うなつて見るとね、妙に氣が引けてさ。」

「弱虫ね、女を惚させるのは男の腕ぢやないの、どうしたんだらう、妾、貴所にはつかりは手も足も出ないの、ほ、ほ、ほ、全く。」

心の裡で塚本は稍心配になつて来た、清太郎に對する友情から、どうかして自分



に懸想してゐると云ふ噂の舟子を捕虜にして、菊枝の廢業を承諾させやうと云ふ作戦計畫から恚うした情の深味へ箭つたのであるが、さて恚うした情交になつて見ると、思ひ切つて其れを切出さうと云ふ勇氣も鈍つて來るのであつた。

「舟ちやん。」と、要は眞面目になつて舟子の顔を眺めた。

「何有？」

「君と僕と恚うしてだらしない處を清ちやんが見たら何と思ふだらう。」

「さ、好い似合の夫婦と思ふかも知れないわよ。」

「どうだか……君は意氣だし僕は書生ツぼうだし、釣合はない事は火を賭るやうだ。」

「戲談だわ、妾、恚う思つてるの、どうして貴郎のやうな初心な人が好きだらうと思つてね、好きだわ、貴郎が本統に……は……止ませうね、こんな事を云つて一人で自惚てゐても捨られると大變だから。」

要には恚ういふ場合に、即座に其れを打消すべき遁辭や世辭を云ふ事は出来な

つた、其れを云つて舟子を喜だせるには餘りに初心なのであるで、黙つて考へながら歩いてゐた。

川の水がうねりうねつてザブリと浪が岸に打つかると、恰度、バラ／＼と路傍の柳の葉に玉と生つてゐる雨の雫が傘の蛇の目を的に一齊射撃をやつた、その飛沫が一滴滴舟子の頬べたへ落掛つたから、

「あら冷たい。」と、云つて拭かうとしたが片手に雨傘を持つてゐる。片手は高く襦袢を手繰つてゐるので、

「塚本さん拭いて頂戴。」

要は自分の半帛を取出して舟子の頬べたを拭いた。

「難有う。」

「なあ舟ちやん。」

「え、何有。」

「君のやうに澤山藝人を相手にした人が僕のやうな書生ツぼうを相手にしてゐたら

齒痒いだらう。」

「知らない。」と、舟子は嬉しさうに横を向いたが「貴所、君だなんて水臭い事を云ふのは廢して頂戴、ね。」

「だつて……何と云ふのさ。」

「お前。」

「失敬ぢやないか。」

「あゝら、では夫婦になつても御亭主が女房をつかまへて君だなんて云つて……お前と呼捨にするゝ失敬になるの？」

「夫婦は別さ。」

「それなら妾と貴郎だつて夫婦も一緒ぢやないの。」

「遠ふよ、まだ……二日か三日……。」

「水臭いわね。」と、舟子は憎らしと云ふ風に要の裾を手繰つてゐる手の甲を、傘の柄でトンと突いて遣つた。

さうして笑顔を耐へて「痛くなかつた。」

「イヤ何ともないよ。」

「可愛いのねえ。」

いつか二人は舊百本杭の、新しく埋立た河岸の前を通つてゐた。

「綺麗だわね、そら塚本様御覽なさい。」と、舟子は要の顔を覗き込むやうにして云つた。

要は云はれる儘に向ふ側の、雨にけぶつてゐる河岸の灯を眺めた、紗を張つたやうな柳橋一帯の家は霧に包まれて朧ろげに霞んでゐる、夢のやうに浮いてゐる灯の影が、さ々なみの立騒いでゐる河の水に映つて金色の鎖を並べたやう、姿は見えないが都鳥の、さびしく啼くのが此の上もなく風情を添へてゐる。

「雨の柳橋、まつたく好い詩だね、イヤ詩と云ふよりも活きた繪だ、何だか端の方に「なにがし」書くと、勸亭流で書いてあるやうな心もちがする。」

「本統に繪のやうだわね。」と、舟子は立停まつて向ふ河岸を眺めてゐる、要も立停

まつた。

もう雨は全く歇んで了つた、ところどころ碧い海のやうな空が見えて来た、稍強い風が吹いて来て、湿つぽい往來の上を撫でて行く。

「變つたなア。」と、要は感慨に耐えないやうに溜息をついた。

舟子は眼を光らせながら「何が變つたの？」

「百本杭が………ね。」

「さう最う百本杭つて名ばかりだわね。」

「東京を知らない人は何處が百本杭だか今ちや解らないだらう、此の具合では……」

「全くよ、解らないわ、ね塚本さん、そら昔のお芝居にあるでせう、百本杭の人殺しなんてね。」

「うむ、昔のやうな百本杭なら何となく凄味もあらうし、芝居の道具にもなるが、今の百本杭ちや何にもならないや。」

「さうね、恁ういふ風に出刃庖丁を振上げて、きつと見得を切つても物凄くないわね、紀伊の國やとも聲を懸られないことよ。」

「は………全くだ。」

「あ、塚本さん貴所………では箱屋にならないわね、妾が恁うして出刃庖丁を振上げると花井お梅、ほ……一寸やつて御覽なさい。」

「戯談ぢやないよ、一張羅が臺なした。」

「構はないわよ、妾が新しいのを拵えるから。」

「女に着せて貰ふなんて意久地のない男だな。」

「さうぢやないわ、どんなに意久地のある男でも、女の方から惚れると、自分の好きなものを着せて遣りたいものよ、自分がお寶を出して拵えて遣つた物を、其の男が着てゐるのを見るとどんなにうれしいか知れないの、全くよ。」

「女の心つてもそれは那樣ものかね。」

「はあ、さうなの、解つてゐるくせに聞くんだもの随分ね。」

やがて二人はだんまりで兩國の袂まで歩いて来た、舟子は何か思ひ出したやうに「お腹が減らない？」と、要の顔を見て訊いた。

要は何にも云はないで莞爾した、舟子は其れを見て嬉しさうに、

「減つたでせう、小常磐へ行きませう、ね。」

「柳橋の？」

「は、小常磐は柳橋切ぢやないの。」

「書生つぼうが那樣意氣な處を知つてるもんか。」

「隠していらつしやい。」と、舟子は要の顔を意味ありさうに眺めて「ね、柳橋へ来たら思出さない？」

「誰を？」

「とぼけてゐるのね、好いわ、どんな人があつても、妾、決して敗けやしない、競争をするわよ、意地だもの、ね。」

恚うして二人は兩國を渡り切つて柳橋の方へ行つた、恰度、龜清の前を通る時、

バツタリと出會つたのは、鈍優の澤村傳之助であつた、傍に黒の紹縮緬の羽織を着た、小柄な女が附いてゐた。

「フン。」と、舟子は鼻尖であしらつて「塚本様、あれよ、評判の傳之助は……？」

「あ、さう、君も一度はね。」

「可厭ね、一寸味を見たの、ほ、貴所君なんて云ひつこなしよ。」

最う小常磐の前へ来た二人はずつと通つた。

川添の、向ふ河岸の灯を見た座敷に通された舟子と塚本の二人は、艶いて一入風情のある雨上りの灯の美しさに釣られて、ぼんやりとしばらく欄干にもたれて眺めてゐた。

ぎい／＼ぎいと川づらを撫でて来る櫓の音には、柔かな興の深い大川端の、むかしに變らない優麗なおもかげが遺つてゐる、しだひに霽れて来た空からは、一ツ、二ツ、三ツ、四つと數へられるほど冴えた星の影が見えて来た。

「一つ星さん見附けたか。」と、舟子は宛がら少女のやうないたひげな態をして要の

方を眺めた。

要はクスクスと笑つて黙つて眼を濁つて流れる川の水に落してゐた、舟子は焦思たさうに寄つて来た。

「どうして黙つてゐるの。」

「だつて……ねんねぢやあるまいし。」

「好いから何とか云はなくつちや可厭よ。」

「何と云ふの。」

「そら恚う……見附けた……。」と、妙に節をつけて云ふ。

要は又笑つて舟子の方を見ながら、見附けた。

「まだよ、ね妾が云つたら。」

「莫迦々々しい。」

「あらく、那樣事を云はないで……むかしの事を思つたら可笑しくないわよ。」

「能く喧嘩をしたね、そら學校からかへりにさ。」

「妾、酒へつき落されて泣いた事があつてよ、最う忘れたでせう。」

「忘れせんとも……随分お轉婆だつたから。」

「だから今でも勿返りなの。」

恚麼事を云つてゐると、女中のでつぶりと肥つたのがお詔ものとお銚子を運んで来た。

「お待遠様。」

此れから三人おもしろさうに雑談をして互に酌したり酌されたりしてゐた、要も舟子も稍さめて来た酒の酔が又陶然と酔が發して来た。

女中は氣轉を利かして席をはづして去つて行くと、舟子は瑠璃のやうに光る眼に一入の色氣をもたせて凝乎と要の方を眺めたが、

「ね塚本様、あなたまだお一人？」

「こんなものに嫁の來てがありませんからね。」

「好き嫌ひが強すぎるからだわ。」

「那樣事があるもんか、僕らのやうな貧乏人は到底妻をもち切れないから。」

「うそよ、知つてるわ、そら何とか主義つてんでせう、そらく、女房をもつて小供なんか拵えるのを嫌つてゐるのよ、西洋から来たんだわ、仍且一時のはやり病氣だつて誰か云つてましたの、貴所も其の仲間でせう、聞いてるわ、いつまでも若い者になつて遊んでゐたんだつて……。」

「享樂主義者かね。」

「そんな難かしい事は解らないわよ、ね塚本さん一人明きものがごいますが、どうでせうね。」

「イヤ那樣事は廢さう、此の上貧乏の上塗をするのは可厭だから。」

「貧乏させなかつたら好いでせう、男ひとりくらゐ立養が出来ないやうな女は駄目よ、妾お世話をしませうか。」

「うむ。」と、妾は考へる眞似をして「まだ時が来ないからね、いづれ其の内どうか……。」

舟子も恚う云はれて何とも云ひやうなく口を噤んだ、舟子は今まで藝人などのお世辭たつぷりな連中と許りつきあつてゐたから、妾のやうな露骨に物を云術はないのが何となく嬉しく又男らしく思はれた、恚うしたのが浮氣な女の却つて勝れた美しい點かも知れない、妾は時期を狙つてゐた、もうそろくと菊枝の一件を切出すうかと内心で考へてゐたのであつた。

「舟ちやん。」と、妾はだしぬけに云つた。

舟子は摺寄りながら「何有？」と妾の顔を見成つた。

「僕のやうなものでも本統に可愛がつて呉るのか。」

「全くよ、誰が誰なんか……實際よ。」

「舟ちやん、お前さんが全く僕のやうな青二才を慕つて呉るなら、僕は……今戸の兄様に何と云はれても、好んば絶交されても構はない、世間の人は何と云はうと色魔と罵られやうとも厭はない、しかし僕には……僕には……今まで誰にも云はない秘密があるんだ、その秘密を打明けて、其れを好く承知をして貰はんとね、

僕はお前さんと楽しい戀を味はふ事が出来ないのだ、ね解つたの。」

いかにも心を決したらしい面色で、要は舟子を眺めながら膝を進めて云つた。

舟子の顔には満足を表はす喜悅の色が流れて来た、さうして色氣の滴れさうな眼つきをして寄つて来た。

「秘密つて………要さん何様事？」

「最う何も彼も打明けますかね、僕は菊ちやんを慕つてゐたんだ、どうしても菊ちやんの事は忘れられないんだ、其の菊ちやんがお前さんと一緒にゐると、奈何もお前さんと一縷に………」と、跡の句は云ひ得るものゝやうに口を噤んで太息を吐いた。

舟子の眼はギラ／＼と異様に光つたが眼が稍釣つて来た。

「ぢや貴所は菊ちやんが家にゐると家へはいらつしやらないの。」

「まあね、やつぱりお前さんと好い情交になつたとしても、菊ちやんの姿を見ると僕の心を刺戟するから。」

「では奈何したら好いの。」

「どうと云つて僕にも考へはないが、唯、お前さんが僕のやうな者を思つて呉るのなら、菊ちやんと僕と會はないやうな方法を取つて呉ると好いと思ふ丈けなのさ。」

慙う云はれて見ると、舟子は自分の色と慾を天秤にかけて見なければならぬやうになつて来た、菊枝を手離す事は自分の大なる利害に係はる事であるし、其れかと云つて折角慙うして幼馴染の要と戀に落ちたのに、まだ面白い楽しみもしないうちに、此の儘に別れるのもつらいし、此れを知らない人から見れば餘りと女の意地がないやうに思はれるのも可厭だし、充分に考へべき問題が出て来た譯である。

「ぢやね要さん慙うしたら奈何、妾の家へ来なくつても貴所の處へ妾が行つたら好いでせう。」

「僕の處？」と、要は舟子を見て問返したが、稍ためらひながら「けれどもね、僕の處へは大勢友人だちも来るし、其れに彼の通り厄介な兄貴が毎日のやうに無心に来るからね又お前さんの来る事を見附かつたら、どんな損を掛けるか知れないから

ね。」

「あの豚勘さんが毎日のやうに行くんですか?。」

「さう、あれには困つてゐるんです、なけなしの僕の小遣を浚つて行くんだからね、あんな穀潰しつたらありやしないお前さんが来る事などを知りつけたら、其れこそ何様無心を吹き掛けるが解らないからね。」

舟子は何遍も強請られてゐるから、豚勘には弱つてゐる、其れに慙う云はれて見ると全く其れが何よりの迷惑で、豚勘に強請られる金があれば、こっそり要と遊ぶ事も出来るのであるが、其處に先づ利益づくの思慮分別が出て来た。

「困つたわね、どうしたら好いだらう。」

「ね舟ちやんどうかして菊ちやんを他へ仕替に遣る事が出来ないのかい、さうしたら僕も何の悶もなしに遊びにも行けるし、自分の家のやうにしても……………」

「だつて彼の妓のからだはお寶が高いから仕替に遣ると云つても……………他ちや迎も出し切れまいと思つてよ。」

「では困つたね。」

舟子は疑乎と考へてゐたが、重苦しい溜息をついて意味ありさうに要の顔を眺めた。

「ね塚本様。」

「何。」

「妾、思ひ切つて菊ちやんを仕替に遣つても好いんだけど、貴所きつと妾と何處までも意地を通して下さる。」

「そりや僕だつて……………唯君の心一つでね。」

「どんな事を云はれても妾を捨ない。」と、舟子は要の膝へ手を掛けて床しさうに顔を見成つた。

舟子ほどの淫奔ものが初心な要のために、その術策にのせられたと云ふ事は、殆んど奇蹟とも云ふべき情界の珍談であるけれども、其處には端倪しがたい浮氣女の變つた氣分が潜んでゐるので、むづかしく云つらば、荒んだ女の戀とも云ふべきも



のであるかも知れない。

「ね塚本さん全く誰ぢやないでせうね。」と、まだ不安らしく舟子は要に向つて念を押したのであつた。

「舟ちやんさへ變らなかつたら僕は大丈夫さ。」

「そりや妾は……?」と、舟子は要の顔を見て莞爾としたが「だけども、妾、貴所に惚るなんて妙だわね。」

要は用便にと云つて席を起つた、別に舟子は怪しむ素振も見えなかつた、要は其れを見極めて私かに電話室へ飛込んだ、さうして清太郎を電話口へ呼出して恚うかうと委しく手段を用ゐた顛末を語つて、菊枝の廢業に就いて一道の光明がある事を通じた、清太郎は痛く喜んで其の吉報によつて此方も手段を執る事を知らせて來た。やがて要は知らぬ顔をして電話口を出て座敷へ歸つて來ると、舟子は又川添の欄干に凭れて向ふ河岸の繪にあるやうさ灯をうつとりと眺めてゐた。

「舟ちやん最う歸らうか。」と、要は手持無沙汰に口を切つた。

舟子は要の方を向くと、其の胸に自分の顔を宛て、恰度いろ氣のない娘つ子のやうな嬌態をつくつて見せた。

「歸りませう。」

「また歩かうか、雨もすつかり霽れたからね。」

「え、さうしませう、真暗い處を手を取り合つてね。」

恚う云ひながら舟子は手を拍つと女中が小走りに急いで來た。

「御用は?」

「御會計を。」

女中は軽くうなづいて會釋をして去つたが間もなく勘定書をもつて來た、舟子は此れを眺めて勘定を拂つて要と一緒に出了、さうして又もと來た兩國を渡つて百本杭の前を通つて河岸に添つて歩いて行く。

絃歌おもしろく今を盛り柳橋あたりの灯は一入艶いて人通の少い典雅な大川端の夜は漸く更けて來た。

「好いわね、あの新内のながし、何處だらう。」と、舟子は虚呂々と眺め廻して云つた。

二人の遠くを流して行く新内のつれ弾に釣られて歩いてゐる、つぶしに結つた藝妓と白緋の沿衣を着た若い男と並んで、とぼくと歩いてゐる姿が、恰度、近松の心中物にありさうな聯想が湧いて来る、河岸の灯を背景にした此の嬌態はどうしても一幅の浮世繪を見るやうであつた。

要は歩きなでら恁麼事を考へてゐた。

舟子は世間が悪口を云ふほどの女ではなかつた、どうして自分のやうな此様青二才が好いのだらう自惚のやうであるが、別に自分を欺いてゐるやうな容子も見えない、もとより舟子が自分を欺いた處で、何等の利益にもなるまい、金を絞らうとすれば、自分には舟子の要求する丈の金はない、舟子は決して僕等のやうな貧乏人を窘めて金をむさばるやうな女ではない、ほかに幾らも金の蔓はもつてゐる、恁う思ふと仍且舟子は自分を慕つてゐるのであらう、全く不思議だ、一種の奇蹟だと深く

感じたのであつた。

「塚本様。」

「え、何だい舟ちゃん。」と、要はだしぬけに聲掛られて感相から覺めた。

舟子は莞爾としてためらつてゐたが、肩と肩を舂と寄せて顔を覗きながら、

「菊ちゃんを仕替へに遣るよりも、落籍つて人があるんだから、さうしませうか落籍させて貰ひませうか。」

「菊ちゃんを廢業？」と、要の眼は光つた。

「え、三千圓ぐらゐならね、仕替へに遣つても可哀さうだから、いつそ落籍して貰ふわ。」

「そりや、其方が好いだらう、菊ちゃんのためにも……。」

舟子は決心したやうになづいた。

## 廢業

舟子を籠絡するための手段であつた要の色仕掛も、色に荒んでゐない初心な丈けに、とう／＼舟子の男を喜ばせるに巧な綾釣に引掛つて、要は最う有頂天になつて了つた、さうして舟子の望むがまゝに、藝妓新道の家に這入り込んで脂下ると云ふ具合になつた、彼の友だちは塚本の享樂主義が最も現實に成功した事を羨だん。

噫、青年の墮落？

しかし恁麼事は要の頭腦には浮かばない、舟子は商賣も怠け勝で、毎日々々要の氣に入るやうに心を碎いて立廻つた、けれども別にそれを苦にもしないでかへつて喜んで要の身のまはりに氣を注げてゐた。

恚うして五六日経つてゐるうちに、清太郎とお初は淺井を訪ふて、其同情からお初の手には保管されてゐる二千圓に、清太郎が妹を懐ふ眞心から拵えられた千圓の金を合して三千圓の金が調達出來たのであつた。

三千圓の金は要の通知に依て豫め清太郎が苦心になつたのである、恰度今日は日曜で、清太郎は三千圓の金を携へて、舟子の家を訪ふつもりであつた、其處へ朝早くから訪ねて來たのは、妹のお菊であつた。

「よく來たわね、姉さんはどうしてゐるんだい。」と、母親のお初は喜んで菊枝の顔を眺めて訊いた。

菊枝の顔には最う廢業も近いうちと思ふ喜悦が滴れる許りに浮いてゐた。

「阿母様、姉さんは夢中よ。」

「またお花かい、三度の御飯よりも好きなんだもの。」

「いゝえ、阿母様お花ぢやないのよ、大變なの。」

「お花でなくつちや……又役者狂ひだらう、困つたわね。」

「いゝえ、役者買ぢやないの、そら塚本の兄様ね。」

「要さんが奈何かしたかい？」

「家に入つてゐるのよ、姉さんが引張つて來たの、さうして妾にも惚けてゐるわ塚

本様は妾の旦那だつて。」

「え。」と、お初は菊枝の顔を眺めて眉を蹙めたが「そりや本統かい。」

「え、塚本の兄様にすつかり惚れてゐるのよ、可笑しいわね。」

「まあ。」と、お初は開いた口が塞がらなかつた。

自分の部屋で洋服を着てゐた兄の清太郎は此の談話を小耳に挟んで、母の部屋にしてゐる四疊の座敷へ入つて來た。

「お菊、塚本が舟子の家へ入つてゐるつて………?」

「え、姉さんが惚れてゐるわ、今まであんな事をした事のない姉様がね、塚本の兄様の事と云ふと、皆な自分で手に掛けてゐるの、可笑しいわ、お風呂へ行くにも姉さんがついて行くのよ。」

清太郎とお初は顔を見合はせたが、吻と太息をついて、

「木伊乃とりがとう／＼木伊乃になつたも同じだね。」と、清太郎は歎息をした、しかし何の事か菊枝には解らなかつた。

お初は心配さうに清太郎を見上げて「ね清太郎、要さんが其のために墮落をしたら大變ぢやないか、申譯がないわね。」

「大丈夫だらうと思ひますがね、彼の男は年の割に理性が勝つてますから………其れに主義として彼様處に這入込んでゐるのは、彼の男の一つは研究資料にもなる事ですから、そのために甘んじてゐるかも知れません。」

「さうかい?」と、お初はまだ不安らしい。

「兎に角、最う少し塚本の行動を見た上で何とか此れを救ふ方法を考へませう、墮落をさせては僕が寢覺が悪いんですからね。」

「さうですともさ。」

菊枝は母親と兄の顔を見比べて黙つてゐたが、何の事やら其の内緒事が能く解らない、唯、塚本の事と心配をしてゐるのだと云ふ事だけは其れとなしに直覺をされたのである。

清太郎は家を出やうとして、先づ菊枝に塚本の盡力した顛末を語らうと思つた。

「お菊。」

「何有、兄様？」

「お前に云つて置く事があるがね、茲に三千圓の金は出来た、此の金でお前は今日から廢業が出来るんだよ。」

菊枝は夢かと許り喜んだ、いづれはと思つてゐたが、今日とは全く思はなかつたのでさすがにうれしさに釣られて黒い瞳が感謝の涙に濕んだくらゐであつた。

「兄様、本統。」

「本統だ、此れからお前を引取りに行かうと思つたのだが、最う今日からお前は阿母様の家へ歸つて來られるんだ、しかし其れた就いてはね、塚本が非常に骨を折つてゐるんだよ、おふねが三千圓の金でお前を手離すと云つたのも、塚本のお蔭なんだからね、其れを忘れては不可ないよ、それに就いては尙阿母様に聞いて見るが好い、解つたか。」

「え。」と、菊枝はやつと母と兄の心配してゐた事が讀めたやうな素振も見えた。

清太郎は間もなく家を出て行つたのであつた。

「ね貴所、今日何處へかいらつしやるの。」と、立膝をして貰の煙を輪に吹きながら舟子は長火鉢の向ふに座つて三田評論を讀んでゐた要に云つた。

寢巻にしてゐる浴衣のうへに、御召の瀧縞の荒つばい黒八丈の襟をかけた温袍を煽つてゐる要は、その眉目調つてゐる容貌と、ほつそりと優がたな處は、知らない人から見ると奈何にも藝人らしく見えた。

で、近所合壁では又舟ちやんが藝人を家へ引入れたと大した評判であつた、口の悪い朋輩などは座敷でも此の噂を喋喋した、さうして衆目は皆な要の鼻下に薄髭を生してゐる處から、夏休をしてゐる新派の俳優と云つてゐた、東京では餘り見た事のない役者だから、きつと大阪の俳優だらうと其の價踏までしてゐた。

「どうしやうかね、實は帝劇を觀に行かうと思つてゐただけれども。」と、要は雑誌を火鉢の臺の上に伏せて舟子を見た。

「帝劇？」と、舟子は鸚鵡がへしに云つてから、稍莞爾として「誰の顔を見に行くの、嘉久子？、浪子？、菊枝？」

「戯談を云つちや可けないよ、芝居を見に行くのさ、女優の顔なんか観たつて満らないからね。」

「どうだか解らないわ、そら昨日誰からか英語の上書をした女の手の手紙が來てゐたんだもの。」

「すべて其の通り色眼鏡を掛けて物事を見るから可けないんだ。」

「返辭につまると那樣事を云つてゐるのねえ。」

「恰度、格子の啓く音が聞えた、さうして入口の方で、」

「御免なさい。」と、訪る人の聲が聞えた。

勝手の方から老婆のお道が取次に出たらしかつたが、蹙音急しく舟子の居間へ入つて來た。

「今戸のお兄様がいらつしやいましたよ。」

「兄様が？」と、舟子は要の顔を眺めた。

「困つたね、どうしやう。」

「會つちや可けない？」

「うむ、具合が悪いから。」

「では憚うなさい、しばらく勝手から出て遊んでいらつしやいな。」

「何處で？」

「そら民の家さんへでも行つて。」

要はうなづいたか起つて勝手の方へソリと行つた、老婆のお道は再び入口の方へ行つて、やがて清太郎を案内して入つて來た。

「珍しいわね、兄様。」

「邪魔に來たよ。」と、清太郎は何か家の中を物色するやうに虚呂々々と眺めてゐた。舟子には其れと解つたか知らぬ顔をしてゐた。

お道は菓子や茶などを連んで來て立去つた、清太郎と舟子は互に顔を眺め合つて

わたが、しばらく口を切らなかつた。

「兄様、何か急用だつたの？」と、舟子の方から口火を切つた。

「先を越されたので清太郎は尙更切出し悪さうであつたが、

「ねおふね、今日は又喧嘩に来たのさ。」と、舟子の顔色を窺つた。

「喧嘩？」と、舟子は繰返して「菊ちゃんの事でせう。」

「さうさ、どうだらう、お前の云つてゐる金高よりももつと安くお菊を廢業させて

呉まいか。」

「三千圓よりも安く？」

「其の半分くらゐで……。」

舟子は眼を光らせて清太郎を眺めたが横を向いて何か考へるらしかつた。

清太郎は一入膝を押進めて来た。

「ね、此れがお客の手で廢業させるのぢやない、兄の私が廢業させるんぢやないか  
大抵の處でお前も我慢をして呉ても好いだらう、兄妹互に顔を赤らめ合つて角芽

立つた事をしたくないから、恚うしてお互に行つたり來たりして喧嘩もしてゐるん  
だ、能く思案をしてお呉れ、ねおふね。」

舟子は膝の上へ眼を落して、肩で息を吐いた。

清太郎は家を出る時には、淺井の同情から母親の手許へ保管されてゐる二千圓と  
自分の才覺した千圓を合せて、舟子の注文通り三千圓で菊枝を廢業させやうと思つ  
て來た、しかし來る途中で、いろいろと考へた末に、もしもなる事なら其の半分の  
千五百圓くらゐで舟子を納得させて、残りの千五百圓を全部淺井の方へ返して遣ら  
なければ、將來いかにも淺井に對して義理が濟まぬやうな、又、自分の社會上の地  
位も下落するやうな氣がしてならなかつた。

で、乗か反か、兎にも角にも其から談じて見様と決心をして云出したのであつた。

「兄様、全く貴所が菊ちゃんを廢めさせるんですか。」と、舟子は些か疑ひの眼で清  
太郎の顔を見成つた。

清太郎は稍まごついたが、素知らぬ顔をして、

「無論さ、出来る事なら僕はお前にも廢めて貰ひたいんだから。」

「妾なんか逆も駄目よ。」

「だから最うお前には何にも云はない、お菊だけは廢めさせて眞面目な女にして遣り度いんだ。」

「でも最う菊ちやんだつて疵物よ、兄様それを承知してゐるの。」

「承知してゐる、しかし其れはお前の手で疵物にしたのも同じだ、お菊が自分から好んで女の節操を傷けたのぢやないからね、私の方にはお菊を教育して行くにも辯解の道もあるし左程に苦勞とも思はんよ。」

清太郎は母のお初からも、淺井の口からも裏面の事情を知つてゐるから、菊枝は表面は淺井の翫弄になつたやうに見せかけても、實際汚されてゐない事を知つてゐるのであつた。

一方、また舟子の方では、惚れた男の要から其れとなしに、菊枝の廢業を迫られたのであるし、疑の眼で菊枝と要の容子を見ると、どうも怪しい處もあつたから、

慥うした間柄には最も強く出て来る嫉妬心から、慥とくづくでなくとも菊枝を廢めさせたいと思ふ心が萌してゐた場合であつた。

「ねおふね奈何だい、まだ解らんかい。」と、清太郎は念を押した。

舟子は決心をしたやうに頭を擡げて兄を見ながら、

「兄様、ではね、千五百圓で菊ちやんを手離しませう、だけでも現金よ。」

「現金は承知さ、ぢや私の云ふ通りにして呉れるんだね。」

「は、其の代りね、妾が何様事しても兄様は今までのやうに口を出しちや可厭上宜うござんすか。」

どんな事かと云ふのは塚本との事を云ふのであらうと、清太郎は直ぐ覺つたが此の方は追つて塚本に對して自分から注意をすれば好いと思つたから、

「そりやお前の勝手にするが好い、私は最う何にも云はんよ。」と、男らしい態度で云つて退けた。

さうして懷中から帛紗包の金を取出して千五百圓を舟子の前へ差出した、其れが



三千圓のうちを半分に分けたのが能く舟子の眼にも解つた。

「兄様、丁と妾の注文通お寶をもつて来て置いて、眼の前で價切るなんて、随分懸引が強いね。」

「銀行屋と云ふものは此様ものさ。」と、清太郎は胡魔化して了つた。

舟子は金を勘定してからうなづいて、

「確かに千五百圓受取つてよ。」

「ぢや誠に濟まないがね、お前の手で、お菊の廢業を承知したと云ふ證書を一枚書

いて呉ないか。」

「宜うござんす。」と、舟子は奥の座敷へ起つて行つた。さうして五分間も經つと一

枚の證書をもつて來た。

「兄様此れで好いんですか、見て下さい。」

清太郎は證書受取つて眺つたが、

「確かに、ぢやお菊は今日からでも私の方へ遣してお呉れ、好いね。」

「え。」と、舟子は云つたが、顔の底には今更惜さうな色が仄いてゐた。

清太郎は禁じ得ない程の喜悦にみたされながら、清井筒を出て藝妓新道の路次から細い千束の通へ出やうとする處でバツタリと浴衣姿の要に會つた。

「お、塚本。」と、清太郎の方から聲を懸られたから、今更要は逃げられもせず、蛙が蛇に道を遮られたやうに立すくんだ、さうして何と云つて好いのか一寸魔誤つて了つた。

清太郎は寄つて來た、さうしていかに嬉しさを顔をして、

「塚本、君の盡力でね、とう／＼おふねは菊枝の廢業を承諾して呉たよ、しかも意外に折れて呉たんで、僕は浅井様に對しても大變肩身が廣いやうな心地がするよ。」と、塚本の肩へ手を掛けた、要もさすがに面喰ひながらも佛頂面が出来ずに莞爾として、

「さうか、そりや何よりだつたね、やつぱり兄様の心が通じたのだらう。」

「イヤさうぢやない、君の企んだ豫定の行動が成功した賜物だ、改めて僕は禮を云

ふよ。」

「憊う云はれて要は何とも返す言葉がなく俯向いた、さうして今更ながら舟子と妙な深い關係をつけて了つた事を慚愧に耐えないものゝやうに見えてゐた。

清太郎も要の顔を見ると、此の刹那に忘れてゐた妹との關係を思ひ出して、弟のやうにした友人を色鬼の手から救ひ出さうと云ふ堅い信念が其處に閃いて來た。

「塚本、僕は何と云つて禮を云つたら好いか解らんくらゐ嬉しいんだが、しかしお菊の廢業が遂げられた上は、君をおふねの家に耽溺させて置くこと云ふ事は友情としても出來ない、イヤ決して妹の利害や損待などを考へて云ふのではない、君を墮落せしめる事が絶対に出來ないのだ、ね奈何だらう、今日とは云はないから明日にでもおふねの家から出て呉ないか。」

「難有う、實際木乃伊取りが木乃伊になつたと云ふのは此の事だ、しかし舟ちやんと約束をした事もあるしね、そんなに急に彼處を出たら、其れこそ何か策畧があつて僕が故意に舟ちやんと關係をつけたやうに思はれるのは残念だ、イヤ心苦しいし

ね、第一さうしては此の後菊ちやんの體に障があるだらうと思ふ、いづれ時を見て彼處を出るから、どうか何事も云はんで呉給へ。」

「イヤ其れが可けないよ、あんな處にゐるとね自然と悪い情性をつくつて了つて出るに出來なくなつて了ふもんだよ、さうなつたら最う駄目だ、今のうちに決心して出て呉給へ、さうでない僕も寢覺が悪くつて詮方がない、妹の廢業のために、友人の君を犠牲にして其儘見てゐられるやうな冷やかな僕なら、初めから妹を廢業させやうともしないし、又君に依頼もしないのだ、斷然彼處を出て呉給へ、魔窟の耽溺は君の筆を焼いて了ふのと同じだからね。」

しかし要は此れに對しては何にも云はなかつた、清太郎は凝乎と要の顔を眺めてゐたが眼を何遍か悲しさうに瞬いて、

「ね、塚本、僕の云ふ事を聞いて呉れ、でない僕も安心して自分の職務についてゐる事は出來ないからね。」と、最も熱心な態度で迫つた。

要は決心をした、儘よ、此の場限りの云拔けに清太郎を喜ばせてから、徐ろに前

後の事を考へやうと即座に思ひ浮べたのである。

「解つた、ちや明日でも早速彼處を出やう必ず君の忠告を無にはしない。」

「ちや出て呉るのか、イヤ其れで僕も安心をした、其れちやね、くれなくも耽溺は廢し給へよ、明日でも彼處を出たら家へ来て呉給へ、母にも君に禮を云はせんと可くないからね。」

「何有、そんな事は……。」

「ちや今日は此の儘別れやう、きつと明日家へ来て呉給へよ。」

憊う云つて清太郎は要に別れて千束町の通へ出た、すると、往來で何か云ひ罵つてゐるのが耳に入つた、其れは要の兄の豚勘が例のやうに酔つて、銘酒屋の女中らしいのを相手に口を尖らかして云ひ罵つてゐるのであつた、で清太郎は塚本に知らせやうと思つて又路次の中へ行くと、要は清井筒の格子の中へ消えたので、其の儘廻を返して了つた。

舟子は要の歸るのを待焦れてゐた。

お初は清太郎の歸るのを首を長くして待つてゐた、菊枝は母親から、兄の清太郎が姉に談判に行つた事を聞いて、小さい胸を痛めて其の成行を心配してゐたが清太郎の歸宅はなかく暇取つて隅田の川づらを撫て吹いて来る川風が薄ら寒い夕方になつた。

すると、格子の啓く音がしたので、先づ菊枝の胸が躍つて、玄關へ馳けて行つて見ると、兄の清太郎は莞爾として菊枝の迎ひを喜んだ、思慮の淺い菊枝にしても兄の特別な笑顔が其の結果の都合の好い事を示したものと想像をした。

「阿母様、兄様が歸つて来てよ。」と、菊枝は母親の居間にしてある玄關と奥の間にある座敷へ行つた、吉か、凶か、お初の胸には波立つて清太郎の復命を聞くのも何となく物憂いやうな氣がした。

そのうちに清太郎は部屋に入つて来た、菊枝は清太郎の居間から常に用ゐてゐる座布團をもつて来た。

お初は清太郎の平素着のほころびを縫つてゐたが、眼鏡を脱しながら、

「清太郎、どうだった、あんまり遅いから妾は心配をしてゐましたよ。」と、ちつと清太郎の顔を見詰めた、菊枝も兄の顔を熱心に見成つた。

「阿母様、非常に好都合でした。」と、清太郎は懐中から金子を入れた紙入を取出して、さうして残つた千五百圓の紙幣を束のまゝで母親の前へ差出した。

お初と菊枝の眼は直ぐと紙幣の束に落されて、

「何かい、おふねが承知して呉ましたか。」と、お初が先づ口を切つた。

「え、承知をしました、皆な塚本の盡力ですよ、而かもね阿母様、あんな因業な事を云つたおふねは半分の千五百圓でお菊の廢業を承知したのです、實に意外ぢやありませんか、此れが殘金の千五百圓です。」

「まあ。」と、お初は眼を光らせながら「能くおふねは承知をしましたわね、どんな拍子で那樣に具合能く行つたんでせう。」

「やつぱり塚本がおふねに施した策畧が成功したのです、つまり塚本は氣の毒に、おふねに捕虜になつて、おふねの家にあるんです、どんな手段を用ゐたか、其れは

解りませんが、兎に角、塚本のお蔭です、おいお菊、お前は日頃の希望通最う藝妓を廢業する事が出来るんだ、しかし其れは皆な塚本の骨折なんだから、其の恩は決して忘れちゃ可けないよ。」

「え。」と、菊枝は耐えられず嬉しさうな顔をして清太郎を見た、其の眼許には滾れん許りの喜悅の色が流れてゐた。

お初の嬉しさは一と通りではなかつた一時に肩の重荷が下りたやうな氣がして何から菊枝に此後の事を話して好いやら解らなかつた、しかし心の底には云ふに云はない深い哀悲が浮いて來た、それは曾て自分が清太郎にも云つた現在自分が腹を痛めて生んだおふねの廢業が、思ふやうに行かないで、妹のお玉の腹から生れたお菊の菊枝が豫定の通り廢業出來た事である、清太郎の前で其の愚痴は云へないけれども、何だか物足りなさがしみくと其の身に感じて今更淋しいやうな氣分になつた。

「ね阿母様、さつそくですが、殘金の千五百圓は貴所から淺井様の方へお返しにな

つて下さいませんか、つまりお菊のからだは私の拵えた千圓と浅井様の御恩恵になる五百圓とによつて廢業が出来た譯になるんです、其の理由を貴女から委しく浅井様にお話なすつてね。彼の人の感情を害ねない様に話をして下さい。」  
「え、宜うござんす、其れぢや今晚にでも早速妾は浅井様のお宅へ伺ふ事にしませう、やつぱり此の妓も一緒にお禮につれて行かないと可けないだらうね。」  
「さうですな。」と、清太郎は一寸首を捻つて考へたが、  
「今日でない方が好いでせう。」と、きつぱりと云つて、清太郎は眼を菊枝の方へ遣つた。

「お菊、もうお前の望んでゐた學校通ひも間近だよ、骨を折つて呉た人や、阿母様の心のうちも能く考へてね、一生懸命に勉強をしなくつちや可けないよ、好いかい決して泥水を飲んで来た女だなんて皆なに笑はれないやうに氣を注げてお呉れ、ね解つたかい。」

「え。」と、菊枝はうれしさうに云つて俯向いた。

千束町

「やい此の阿魔め、餘り莫迦にしやアがると、活かしちや置かねえぞ、手前俺に何と吐したんだ、覺えてゐるかい、此の豚勘の面へ泥を塗りやがると、首と胴と喰附いちやのねえから其れが承知かい。」と、眼の血走つてゐる豚勘は、荒い瀧縞の浴衣の袖をまくし上げて相手の女を睨んだ。

けれども、女は何にも云はずに、奈何にも侮辱したやうな容子をして俯向いてゐたが、その視線は横に反れて理髪店の内を見てゐるらしい。

どうやら此界限では臻つて羽振の好い銘酒屋の女らしい、頭髮は梳髪の、黄楊の櫛へぐるぐると巻いた、色は眞白くつて、肉附の好い顔の、道具は相當に調つた、永い間の浮いた稼業が襟筋から爪先まで何處となく意氣に見せてゐる。

「やい何故黙つてゐるんだい、何とか吐かさねえのかよ。」

女はまだ黙つてゐた、さうして煩さ相に豚勘を眺めて行き掛けたが、豚勘の猿臂

は延びてムツと女の肩尖を鷲掴みにつかんだ。

「待ちやアがれ、阿魔め、手前逃げるのかよ、さア面白いや、逃げるなら逃げて見ろよ、ヘン手前たちに綾釣られて指を咬へて尻込んであるやうな俺だと思ふのか、巫山戯やがつてウヌ。」

「見つともないから離してお呉れよ、此處は往來だよ。」と、女の鼻息は比較的荒つぽかつた。

「往來は承知だよ、文句を云はれるのが可厭なら、俺の顔を立てろへ、此の豚勤はな、自分の情婦を人に奪られて其の儘泣寝入に黙つておられると思つてゐるのか、さア俺の顔を立てろよ。」

「どうすれば好いのさ。」

「奈何する？ 解つてゐるぢやねえか、手前の方から手切の金を遣すんだ、手前だつて、吉原で働いてゐて、此の猿之助横町へ流れ込んだ阿魔だ、看護婦の成り損ひや淫奔者の成の果たア譯が違はアな其のくらの事たア解つてゐるだらう。」

「豚勤さん妾に那樣金が出来くるなら今頃は疾くに此様ところを出て丁と一軒の世帯を張つてゐらアね幾ら口に税が掛らないからつて好い加減にしてお呉れ。」

「ぢや手切の金は出せねえと吐すのか？」

「當前さ。」

豚勤のチョン髷が動いたかと思ふと、彈丸のやうに其の鐵拳が女の頬べたへ飛んだ、呀つと叫んで女は、其の頬を両手で押へたが、その儘其處へ縮んで了つた、豚勤は怒に任せて女を蹴つた、女の體は鞠のやうに横ざまに轉んだ、又豚勤の足は女の腹部へ飛んだ、魂消るやうな悲鳴が女の口から洩れた、けれども豚勤の無鐵砲に怖れて誰も手を出すものはなかつた、その周圍は通行の人や近所の人々で黒山のやうに埋まつた、豚勤は暴虐無盡に女を苦しめてゐる、すると見るに見兼ねた理髮店の主人が飛んで来て豚勤の前へ立塞がつた。

「豚勤様、好い加減に勘辨して遣つてお呉んねえ、多寡が銘酒屋の女ぢやねえか、却つてお前様の名折れになるぢやねえか。」

「親方、ちや何かいお前様が仲へ入つて此の捌きをつけてお呉んなさんのか。」  
 「どういふ事か知らねえけれども、私で出来る事ならお前の顔も立て、上げやうぢやねえか。」

「さうか、其れならお前様に任せやう。」と、豚勘は昂然と云つて退けて周囲の人を眺め廻したが、まだ飽らぬ狼が餌食を他に求めるやうにちろ／＼群集を見渡した、其の眼には險惡な相がアリ／＼と見えてゐた、一人、二人、三人と寄り集まつた人は去つて行く。

「見世物ぢやねえぞ、此の獸物め。」

誰にかまた暗唾を吹掛ける氣色が見えるので蜘蛛の子を散らすやうに散つた。

ひい／＼と泣いてゐた女は痛さを耐えて豚勘の傍へ寄ると、其の體を摺つけて、「やい此の野郎、殺すなら殺せ、さア殺せ。」と、阿婆摺の本性が其の言葉に現はれた、豚勘の拳が又女の顔の上に落つるかと思ふと、理髮屋の主人は其の手を押へて止めた。

「待ちねえよ、そんなに弱い者を窘めなさんなよ、可哀さうに。」

「何が可哀さうだい。」と、豚勘は主人に突掛つて來た。

「見つともねえから兎も角も私と一緒に家に入んねえよ。」と、理髮店の親方は豚勘を無理につれて自分の家へ入つて了つた。

親方は一方の女を、手の明いてゐた職人に吩咐けて其の家へ送らせる事にした、職人は女を劬つて猿之助横町へ入つて行く。

此の界隈を總稱して十二階下と云ふ。其のうちで最も暗い色彩を極度に現はしてゐるのは此の猿之助横町である。

猿之助横町？何と云ふ典雅な名であらう、此横町の入口に近い處に、今の段四郎親子の住居がある、其處から此の名が出たのである、一間ともない細い路次のやうな處を、兩側に新しい小さい入口の家が櫛の齒のやうに並んでゐる、或る意味から云つたらば魔窟であるかも知れない、けれども一方から見ると一種の歡樂郷である、夜の世界が此の界隈に、もつとも慘な或る刺戟を與へて、憐な女の節操が鐵工場で

冶金が切られるやうに、金や銀にふみにじられてゐる、此處へ群がつて來る人だちは女といふものを、痰壺のやうに心得て、醜惡な炎が慾の的を遠慮なく露骨に射つてゐる。

夜になると宛で吉原のちよんく格子の前を通るよりも喧しい處も、晝の、日の影が高いので、森閑として話聲さへ聞えない、ポツンくと下手な調子も碌に合つてゐない三味線の音が洩れてゐる。

「民ちやんお前かい、豚勘に酷い目に遭つたと云ふのは？」と、職人に扶けられて來た女の姿を見た、此れも櫛卷の小肥に太つた女將らしいのが奥から飛んで來た。

「眞實に酷い目に遭はせやがつたよ。」

「まあ。」と、女將らしいのが職人と一緒に女を扶けて座敷へ入れた、女は其の儘バツタリと泣倒れて了つた。

職人は歸つて行つた、其の跡へぶらりと入つて來たのは、どうやら刑事係らしい風體の男であつた。

「お、風間の旦那、妾は今、お願ひに伺はふと思つたのでございますよ。」

憊う云つた女將の眼には、いかにも口惜しさうな涙がキラキラと光つてゐた、刑事係らしいのは其れと覺つた。

「どうしたんだ、民坊が泣いてゐるやうだかおや怪我をしてゐるね。」と、刑事係らしいのは上櫃に腰を下してゐたのが、穿いた雪駄を脱いで座敷へ上つた。

さうして女將が職人やお民の口から聞いた豚勘の暴狀を逐一に物語つた、刑事は黙つて聞いてゐたが、徐にうなづいて、

「好ッ、しばらく豚勘を懲して遣らないから、此度はちつと手嚴しい目に遭はせて遣らうかな。」

此の一言が表を通つた豚勘の娘お竹の耳へ入つた。

で、お竹は立停つて出て行かうとした刑事係の風間の前へ立塞つた。

「旦那、勘辨してお呉んなさいまし、阿父様の悪い事は妾がおわびをいたしますから。」



「阿父様？」と、風間は云ひ返したが「阿父様つて誰だい？」

「豚勘。」

「うむ。お前は豚勘の娘か、うむ評判の好い親孝行の枝豆を買つてゐる娘だね。」

「え。」と、お竹は微に云つて汚れた指を咬へながら俯向いた。

「可哀さうだな、しかしお前の阿父様はな、今、此處の女を酷い目に遭はせたんだ見ろよ、あんな酷い怪我をさせたんだ、だから私の耳へ入つたうちは打遣つちや置かれないんだ、好いかな、お前は感心だが、阿父様は勘辨することが出来ないんだよ。」

「そんな事を云はないで勘辨してお呉んなさい、阿父様が警察へつれて行かれると妾と妹と二人で寝てゐる阿母様をどうする事も出来ないんですもの。」

「阿母様が寝てゐるつて……阿母様は病氣なのか。」

「え、お医者様へも懸る事が出来ないんですもの、だから妾……どうか阿父様を勘辨して遣つてお呉んなさい。」

恚う云つてお竹はボロ／＼と滾れて来る涙を手の甲で擦つてシヤクリ泣きをした風間刑事はさすがに躊躇つた。

此の界限では枝豆賣の孝行娘と云へば誰でも知つてゐる、今、風間刑事と其の孝行娘が話をしてゐるので、近所の人たちは何事かと細い格子の間や、僅かに顔丈が見えるやうにしてゐる硝子の間から覗いてゐる、眼の前に二人の談話を見せつけられた銘酒屋では、まづ女將が起つて来て入口に立つてゐる。

「何と云つても詮方がない、お前の阿父様はな、日頃から警察の方で眼をつけてゐるんだから、恚う云ふ事があると、見通す事は出来ないんだ、お前の孝行な事は俺も聞いて知つてゐる、しかし阿父様の罪を許すと云ふ事は出来ないのだ。」

「そんな事を云はないで阿父様を助けて頂戴、ねえ警察の叔父様、妾、後生ですから。」

「那樣阿父様のない事を云ふもんぢやないあまりしつこく云ふと此叔父様は叱るよ。」と、風間刑事は稍聲を高くして云つた。

けれども親思ひのお竹は那樣事では引込んでゐない、一層親を助けたいと云ふ小供心が強くなつて風間の前へ立塞がつた。

「警察の旦那、後生ですから、阿父様を助けて頂戴、さうでないと妾……阿母様の病氣を癒す事が出来ませんですから。」

「煩さいッ」と、風間は叱り飛ばして立去らうとした、しかしお竹は追蒐けながら風間に取纏つて、

「旦那、助けて頂戴、阿母様が那樣事を聞いたら、死んで了ふのだから。」と、風間の顔を眺めながら云つたが、頬には涙がポロ／＼と流れて留度もなく滾れてゐる。

風間はお竹を振拂つた、お竹は其の反跳でバタリと轉んだ。

恰度、其處へお民も来て女將と一緒に見てゐたが、あまりお竹が可哀さうになつて來たので、とつかはと入口から草履を引掛けて走つて出た。

「風間の旦那、しばらくお待ちなすつてお呉んなさいまし。」

風間刑事は振返つたが、不審さうな眼をして、

「何だ、何か用かい？」と立停つてお民の寄つて來るのを待つてゐた、お民は轉んだ儘に泣いてゐるお竹を抱き起してから、風間の傍へ寄つた。

「誠に申譯がございませんけども、妾もう何とも思ひませんから、豚勘様を助けて下さいませんでせうかしら。」

「そりや可かんよ、お前は願下げるつもりでも一旦俺の耳へ入つたら、なか／＼打遣つちや置けない、豚勘のやうな彼様奴は此の淺草から追拂つて了はんと、第一取締がつかないんだ。」

「さうでもございませうが、只今あの子の云ふ事を聞きますと、豚勘様のお内儀様が病氣で寝てゐると云ふ事ですから、豚勘様がゐなかつたら、其れこそ彼様子の手一つでは奈何すると云ふ事も出来ません、云はゞ妾が病氣にしたやうなもんですから。」

「お前が病氣にした……其のくらの事が解るなら、何故貴様は豚勘に擲られるやうな事をしたんだ、おい貴様は警察をおもちやにしては可けないよ、俺たちは貴

様たちの傀儡になつてゐるんぢやないからな。」

「いゝえ、決してさういふ譯ではございませんが、餘り此の子が可哀さうですから若し旦那の御了簡で豚勘様を見逃がす事が出来ますなら、どうか今日の事は妾願下げいたしますから、御勘辨なすつてお呉んなさいまし。」

風間は黙つてお民の顔を鋭い眼をして眺めてゐた、すると、女將も下駄を危つなかしく引摺つて風間の傍へ寄つて來た。

「旦那、何ならどうか民ちゃんのお願ひ申ました通りなんですから、今日の處はお許しなすつて頂けませんかしら、あの人だつて妾の處へは随分とお寶を捨てゝゐるんですから。」

「貴様たちは全く困るな、それなら其れで云はんけりや好いちやないか。」

「旦那」と、お竹は悲しさうに風間に抱きついて阿父様が此度警察署へ引張られると、阿母様は死ぬつて云つてゐるんですから、どうぞ御勘辨なすつてお呉んなさいまし、ね旦那。」

「詮方がない、今日は勘辨して遣らう。」

折能く其處へ理髮店の親方が、女將やお民に豚勘の云ひ條を取次ぎに來たが、平素から風間刑事とは顔も見知り合つてゐるし、風間が犯人の行方などを探しに便利な理髮店に始終這入り込むので、取付けて親方とは昵懇にしてゐた。

「お、風間様、どうしたんです。」と、親方は風間に聲を掛けた、すると、風間刑事は振り返りながら、

「金床の親方が、何有ね、大した事はないんだが、相變らず豚勘が暴れた一件さ。」と、親方が知らないものと思つて云つたが、遽に豚勘は金床にゐる事をお民と女將から聞いたので「さうだ、君の處にゐるんだね、實は君の處へ行ふと思つたんだ。」  
「さうでございますか、實は私も見るに見兼ねて仲へ入りましたんですが、今日の處は御勘辨なすつてお呉んなさい、今も豚勘から委しく聞きましたが、双方に落度がございますんですからね。」

「そりや、どうせ………」と、風間は女將とお民を見て云つたが、其の視線をお

竹の方に移して、

しかし豚勘に此様孝行娘があるとは思はなかつた、實は此の娘の親思ひな殊勝な心に免じて今日は許して遣らうと思つたのさ。」

と、親方の方を凝乎と眺めた、親方の顔には得も云はれぬ喜悅の色が流れた。

「どうか今日の處はさういふ事にお願ひいたします、私からも豚勘へ好く申ますから。」

「ちや私は此儘引下らう。」と、風間刑事は笑ひながら右の路次俚俗「松緑横町」と云ふ方へ曲つて行つた。

女將はお民と一緒に金床の親方を伴つて自分の家へ来た、お竹は何遍か禮を云つてから走つて行つた、多分金床へ行つたのであらう。

金床の親方は此の附近に長く生活してゐるけれども、曾つて恁ういふ中の氣分を味はつた事はないのであつた、で珍らしさうに家の中を眺めた、一體に暗いジメジメした家の中が、何の臭氣とも云はれない妙な匂が鼻についてならない、底の方に

白粉の香も漂つてゐるやうに思つた、女將の居間にしてゐる處と云つても狭い四疊の處が、二階と勝手へ行くには通らなければならぬ要所になつてゐる、何々稻荷被官様、摩利支天、帝釋天、清正公様、神佛混淆の神棚やら縁喜棚が祭られてゐるし、其處には「金の神」と不思議に六朝で書いた賽錢箱を兼た其日々々の稼ぎ溜をに入れる錢箱が置いてある、狭苦しいのに箆笥が三本も並べて、其の上には小さい古い帳簿や人形の箱が飾つてある、其の傍には皮の手垢に黒ずんだ古三味線が一挺掛けてあつた、表の通りに向つた硝子格子の前には、所謂銘酒屋女の身仕舞に使ふ古い鏡臺が二つ許り並べてある。

お民は茶を汲んで親方の前へ差出した。

「親方、番茶でございませうけども……。」

「よ、有難う。」と、金床は其れを手にとつた。

女將は鼈甲羅宇の煙管で貰の煙を輪に吹きながら、

「親方どんな事を豚勘は云つてゐるんでございませう。」と、疑懼の眼が光つた。

「うむ、別に大した事はないさ、彼奴の事だからね、幾らか物になりや好いんだらう、多寡は解つてゐるよ。」

「ほんとうに困つちやうね、民ちゃん、だから最初から妾が云つたぢやないか、あんな奴に何の見込があつて惚たんだらうね。」

「そりや何處かに好い處があるんだらう、彼奴も苦勞人だからよ。」

「途中で愛想づかしをして寢返を打つくらゐなら、あんな奴に手をつけるもんぢやないよ、酷い目に遭はされておまけにお寶を取られてさ、此様つまらない事つちやありやしない、親方どんな事を云つてゐるんです。」

「どんな……と云つて金の多寡かい。」

「は。」と、女將は金床の親方を見成つた、お民の眼も光つた。

「二十圓くらの手切の金として遣りや好いさ、でねえと又煩せいからな、何とか二十圓くらの都合は出来ねえのか。」

「そりや其くらゐなら民ちゃんの事ですから妾が立替へても宜うござんすけれども

ほんとうに満らないわね。」

お民はハーツと溜息を吐いて俯向いた。

豚勤の娘のお竹は眞幕に金床の店へ駈つけて来た、さうして闕際に立つて店のうちを眺めたが父親の姿が見えないので、照れ臭さうに職人や客の顔を見廻した。

「お断りだよ、そんな處へ立つちや可いねえな。」と、職人の、まだ若い炮のあるのが物貰ひとでも思つたのか、鋭い口調で云つて退けた、すると、お竹は稍遠く身を退いて、

「阿父様が来てゐるんだから。」と、微に職人の方に向つて云つた。

客の、のつべりした芝居の囃子方らしいのが、奥の方を指しながら職人に眼で知らせた、職人は軽くうなづいて、

「あ、豚勤さんかね。」と、お兼に訊くとお竹は黙つて頷でうなづいた。

職人は剃刀を手にもつた儘で、奥の方へ顔を向けて、

「豚勤さん娘さんが来たよ。」と、やさしい聲で云つた、すると、豚勤は酒の馳走を

うけてゐたと見えて、顔を赤くして天獄羅臭い息をつきながら出て来た。

「あ、阿父様。」と、お竹は豚勘を見るなり馳けて行つた。

豚勘は眉を顰めながら舌打ちして「何だつて此様處へ来たんだ、阿父様は跡から歸るからお前は早く家へ歸んねえ。」

「妾ね、阿父様に知らせに来たのよ。」

「何を知らせにだい。」

「あのね。」と、お竹は句切つて客や職人の顔を見廻したが「警察の旦那が阿父様をつれて行くつて云つたんだもの。」

「何、俺を……警察へ……此處へ来るのか。」と、豚勘は慌てながら云つて稍顔の色を變へた。

「だけでも、妾、阿父様をつれて行かれては阿母様が困るからお願ひをしたんだもの。」

「さうしてどうしたんだ、那樣泣づらをしねえで早く云はねえか。」

「警察の旦那はね、豚勘は癖になるから私の耳へ入つたら許されないつて……。」

「ぢや此處へ来るんだな。」

「いゝえ、さうしたら其處へ愛の家のお内儀さんと阿父様の知つてゐる姉さんが出て来て、妾が可哀さうだからつて頼んで呉たんです、だからやつと勘辨して呉たんだもの、ね阿父様後生だから最う悪い事をしないで頂戴、妾、今日の事は阿母様にも誰にも云はないからね。」

「さうか、イヤ解つた〜お前は心配をする事はねえんだ、早く家へ歸つて待つてゐろ。」

「でも阿父様、ほんとうに歸つて来るの、もう家にはね。」と、お竹は低く四邊を憚るやうな小さい聲をして「お寶がないんだもの、阿母様のお薬も買ひに行けないんだから。」

「醫者の處へ行つてな、跡から阿父様がもつて来ますつてからつてお薬を貰つて歸るんだ、好いかい。」

「お醫者様では可けないつて仰有つたんだもの。」

「可けないと吐いたつて……好つあの敷醫者め、今まで幾ら俺が診て貰つて金を運んだか知れねえんだ、そんな薄情な事を吐すと薬局を叩き壊して遣るから好や。」

と、豚勘は腕をまくし上げて出て行かうとした客も職人も眼を光らせて餓えた狼のやうな癡猛な豚勘の容子を注目した、お竹は犇と父親の前へ取絶つた。

「阿父様そんな事をしては可けないよ、だから警察の旦那に叱られるんだからね、そんな事をしないで假色をつかつてお寶を儲けて歸つて来て頂戴。」

恚う云はれて見ると、さすがの豚勘も負ふた子に淺瀬を教へられると一緒で、何だか病褥に寝てゐる女房や子供たちが可哀さうになつて無茶苦茶な事も出来ないふと心に浮んだので、

「好しく阿父は何にも亂暴はしねえ、だから早く家へ歸つて待つてゐる、俺の歸る時にや薬を買つて行くからな、好いかい。」

「え、ほんとうに歸つて来てね。」

「あ、大丈夫だつてことさ。」

お竹は安心したやうになづいて金床の店を出た、さうして玉姫町の家へ行やうとすると、藝妓新道の方から出て来た叔父の塚本要に會つた。

「あ、叔父様。」

## 素 人

菊枝は廢業してから、清井筒の菊枝で通つた名が、河村きくで通るやうになつた、さうして自分から希望した學校通の事が、非常にお菊の趣味を有つて、兄の清太郎に就いていろく學校の事を聞いたり、夜は遅く夜の更けるまで清太郎から宛がはれた讀本を教はつた。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

清太郎の家では親子三人が、月見の話で賑つた日の午後、お菊は出稽古に行つた

先から讀本や習字の反古を紫の風呂敷に包んで、いかにも希望に輝いた眼をして家へ歸つて来た。

「只今」と、お菊は玄關を入つて、母の居間にしてゐる部屋へ行くと、お初は喜びながら出迎へた。

「今日は大層早かつたわね。」

「え、先生かね、お葬式にいらつしやるんで早く退いて来たの。」

「さうかい、お腹が減いたらう、さ丁と御飯の支度をして置いたからお喰ひよ。」

「は。」と、お菊は一人で勝手へ行つて脚のある小さい黒塗の膳を取出して、さつぱりしたふきんの冠せてある膳の上を眺めた。

母親の慈愛はお菊の好きな物を丁と手料理に拵えて膳の上に取り揃へてある、お菊はうれしそうに箸を取つたが一箸つけては傍に置いてある讀本を讀んで、箸を筆の代りに、膳の上を書いてゐる、母親のお初は餘り食事が長いので、

「菊ちゃんやまだ喰べてゐるのかい、莫迦に長い御飯だね。」と、お初は勝手へ来て

見ると食事と勉強が兼帯である。

お菊は莞爾としてさすがに體裁悪さうに箸を膳の隅へ置いた。

「何をしてゐるんだい。」

「字を稽古してゐたのよ、難かしくつて書けないんだもの。」

「其れなら御飯を済ましてからにお仕、また那樣事を兄様に見附かると叱られますよ。」

「もう廢めてよ。」

恚う云つてお菊はやつと眞實に食事に取蒐つた。

表に俵の呼鈴の音が聞えたが、俵の轆がガタンと下された、お初は玄關へ行くと其れは清太郎が歸宅したのであつた。

「お歸り。」

「只今」と、清太郎は靴を脱いで自分の居間へ通つた、お初は追蒐けるやうに清太郎の部屋へ行つた。



「どうだつたい、學校の方の具合は？」

「まあどうやら都合がよさ相ですがね、兎に角、本人に會つて相當の試験をして見やうと云ふのです、私も毎晩あゝして勉強させてますから、縦や順を追つて行かないくつても最う尋常六年くらの修養は出来てゐると思ひますがね。」

「そりや菊ちゃんは尋常四年まで學校へ上りながら遊藝の方を稽古してゐだんですからね。」

「全く此頃では熱心は其の人を動かすもんで、本も随分讀めるやうになつたし字も相當に書けるし胡麻化せませんがね、どうも學校の順を追はん丈けに、地理とか歴史とかさういふものが困るんです。」

「さうかね。」と、お初の顔には稍不安らしい色が見えた。

清太郎は凝乎と考へてゐたが、輕くうなづいて、

「まあ、しかし私が其の方も何とか教へる事にしませう、さうして一日も早く正式の學校教育をさせる事にしませう。」

「どうかさういふ事にしてお呉れ、彼の子も一生懸命なんだからね、あの調子なら首尾能く高等女學校へ入れても卒業しませう。」

「勉強次第で卒業は出来ませう、其れに幸な事にはね、あんな中にゐた丈けに多少世間いろゝの人から教はつた耳學問の力が随分と助けると思ふのです。」

「いろゝ生意氣な事を知つてますからね。」

「しかし阿母様くれぐれも云つて置きますが怖ろしいのは男の誘惑です、其の方はあんな中にゐた丈けに充分に發達してゐますから、貴女から能く戒めて、決して決して私の顔を汚さないやうに注意して頂きます。」

「え、承知をしました。」

其處へお菊はちよゝと走つて來た。

「お菊、兄様はね特別にお前へ注文をして置かなければならない事があるんだ、能く兄様の云ふ事を聞いてお呉よ。」と、清太郎は座り直して妹のお菊に向つた。

此頃のお菊の胸にはすべて喜悅の波が漂よつてゐるので、其れがおのづと顔に出

て、母親や兄の眼にうつるお菊の笑顔は、非常な快感を與へられてゐる、今も兄が羨つて眞面目に云つた言葉でも、お菊には何となく嬉しく感じられて仍且莞爾として其れを受けた。

「ねお菊、他でもないが、今日は私は友人で下谷の第一高等女學校に勤めてゐる人を訪ねて行つたんだ、さうしてお前の事を隠しはせず、何も彼も話をしてね、何かして特別に入學を許して貰ふやうに頼んだ、しかし資格のない者は入學を許す事は出来ないといふので兎に角その中にお前を呼んで試験をして、果してお前の學力が尋常六年卒業以上の修養があつたら、尋常小學卒業の免狀はなくとも校長と相談をして入學を許さん事もあるまいと云つてゐたんだ、迎も今其の試験に應ずると云ふ事も出来ない、けれども、お前の勉強のしやうでは、又何様好い成績で許されることも限らんから一生懸命勉強をして其の試験に合格をしなければ可けないよ、好いかい。」

お菊は黙つて莞爾々々とうれしさをうなづいた、兄の清太郎は一にちり膝を押

進めた。

「其れからねお菊、學校の方では皆なお前が雛妓をしてゐたと云ふ事を知つてゐる譯になるんだ、しかしお前は汚れない潔白な體であると云ふ事は兄様が堅く保證をして來たのだ、だからね、學校へ入つたにしろ決して雛妓をしてゐた時のやうな蓮葉な行ひをしては可けないよ、口の利きやう、體のこなしやう、ヤツぱり泥水を飲んだものは駄目だなんて云はれないやうに注意に注意をしてね、阿母様や兄様の顔のつぶれるやうな事をして呉ては困るよ、イヤ兄様や阿母様よりも那樣事をしては、お前に同情をして骨を折つて呉る私の友人や女學校の校長様の顔をつぶす事になるんだからね、能く此の事は腹の中に入れて置いて貰はんと困るよ。」

「え、解つてよ。」

「お菊、上の空で聞いてゐては可けませんよ、其れで失策と最うお前の思つてゐる事が臺なしになつて了ひますよ、兄様や妾が骨を折つて姉様と喧嘩面までしてお前を廢業させた事も水の泡になるんだからね、好いかい。」

「え。」

清太郎はお菊の至極眞面目な態度を見て心から希望が胸の裡に輝いて来た、お菊の光つてゐる眼のうちには何物の障礙も焼きつくして了ふやうな熱火が燃えてゐるやうに思はれたのであつた。

それと同時に清太郎はお菊の常識が何様點まで發達してゐるか、其れを試して見やうといふ好奇心が不圖頭に浮んだ。

「お菊、お前は横濱を知つてゐるかい。」と、頗る眞面目に清太郎は第一問を放つた。

お菊の眼はキラ／＼と輝いたが、母の方を見て莞爾して、

「知つてよ、濱でせう。」

「うむ、何方の方だい。」

「あら兄様、東京の向ふよ。」と、指をした。

「向ふでは解らないね、東か西か。」

「南の方だわ。」

「うむ、何をやる處だ。」

「異人様のとつさりゐる處よ、そら大きな船が澤山ついてゐるわ。」

「うむ、ちや横須賀は？」

「濱のまだ向ふよ、もつと南の方だわ、そら海軍の水兵様が澤山ゐるわ、軍艦があるわ、妾ね、自動車で飛行機を見に行つてよ、横須賀まで行つた序だつたの。」

「何といふ處へ？」

お菊は俯向いて考へてゐたが、なか／＼思ひ出せない、何遍か頭の中で繰返してゐるらしかつたが、何か思ひついたやうに兄の机の處へ行つて一葉の新聞を取つて來て眺め初めた、さうして眼をずっと曝してうれしさうに、

「此れよ、此れ追濱ツて處だわ。」と、得意さうに云つた。

清太郎は此の答案には非常に趣味をもつた、さうして此れくらの常識に富んでゐればと些か心強く感じた。

椽の下に啼いてゐる蟋蟀の聲も、何となく哀れぼく身に泌む夜の暮が、今戸一帯

の天へ下されると、隅田川から吹いて来る風が一入寒く戸の隙を漏れて来る。

お菊は古い新聞の半切を並べて、一心不乱に清書を遣つてゐると、母親のお初は嬢様のお守の容で、傍で墨を擦つてゐた、もし二人の間柄を知つてゐる他人の眼から見たら何様美しい感じが起つて来るか知れない。

「阿母様、此れ知つてゐて？」と、お菊は墨痕淋漓と滴る隷書をお初に示した。

母親はそれを眺めては、ととと笑ひながら、

「幾ら阿母様が舊弊人で字が讀めないつたつて其れくらゐの字は讀めらアね、兄様の苗字と名ぢやないか。」

お菊は莞爾として又筆に墨をふくませて書いた。

「これは？」

「妾の名だよ。」

「では………」と、お菊は考へてゐたが又四角な字を書いて見せて「此れは？」

「塚本要だらう。」

「さうよ。」と、お菊は云つたが、顔の底の方に妙な羞んだやうな色が流れた。

其處へ奥の居間から兄の清太郎は懐中手をして出て来た、そうして清書を引寄せて凝乎と眺め初めた。

「うむ、上手になつたね、熱心は争はれないものだ。」

すると、お菊は風呂敷の中から、今日兄の清太郎が買與へた小學生徒用の歴史讀本を出した。

「兄様、妾、こんなに讀んでよ。」と、美しい琴が挟んである個所を示した。

清太郎は其處を眺めながら手に取つた。

「成程、どうだ讀んで解るか。」

「え、解るわ、假名が振つてあるんだもの、だけでも難かしい字も澤山あつてよ。」と、お菊は鉛筆で印である個所を見せた。

「此れ何といふ字。」

「檢非違使。」

「何の事。」

「さうさね、今時で云つたら警視總監の事を云ふのさ。」

「あら安樂の御前様の事を。」

「イヤ誰の事でも構はん、其時の警視總監の事を云ふのさ。」

「では昔でも警察があつて？」

「警察とは云はないが……さういふものは大昔でも中昔でも近い昔でもある。」

「そらお芝居でしる大岡越前の守ね、あの人も検非違使と云ふの。」

「違ふ、あれは町奉行。」

「でも裁判をするんぢやないの。」

「つまり今日の裁判官と警察官を一緒にしたやうなもんさ、町奉行と云ふのは徳川

時代の名稱さ。」

お菊は了解したやうになつた。

「なアお菊、お前明智光秀といふ人を知つてゐるか。」

「知つてゐてよ、そらお芝居でしるんでせう、重次郎の阿父様だわね。」

「さう〜何様事をした人だい。」

「あのね、旦那様を殺した人なのよ。」

「旦那様？」と、清太郎は繰返して思はず笑ひながら「御主人の事か。」

「え、さう、御主人。」

「その御主人は誰だい。」

「そらね、蘭丸の旦那様ではない………のよ御主人よ。」

「信長、織田信長と云ふのだ。」

「織田信長。」と、お菊は詰んずるやうな容が見えた。

「ぢや豊臣秀吉は誰の家来だい。」

「解つてゐるわ、今云つた織田信長でせう。」

「あの時代を何の時代と云ふか知つてゐるか。」

「そんな難かしい事は知らないわ。」

「無理もないな、彼の時代をね、戦國時代と云ふのさ。」

「戦國時代。」

「さう、戦ばかりしてゐた時だからね、好いかい、覚えて置くだよ、關東の徳川、甲斐の武田、越後の上杉、近畿の織田、中國の毛利……。」と、一々清太郎が云ふのをお菊は小さい手帳へ書き記してゐる。

秋晴の、空には一點の雲もなく心地好い日和の朝であつた、竹屋の渡は學校の生徒や老幼男女が秋草を見物に向島に行くのが非常に賑つてゐた、もう庭の牽牛花も萎びて果敢ない運命は一葉毎に枯れて行く其の蔓に見え初めた、赤い蜻蛉が幾つともなく飛交ふて、丈のびて來た菊の、支にしてある竹の尖に列をつくつてゐるのが強く、人には秋と云ふ感じを與へた。

清太郎は銀行へ出て留守であつたが、お菊は暖かい椽へ出て地理と歴史の讀本を餘念なく勉強してゐた、隣家の、宗十郎の宅からは蓄音機のオペラが手に取るやうに面白く聞えてゐる。

母親のお初は勝手にどうやら洗濯物をしてゐるらしい。

すると、電音が玄關の方に聞えたが、

「御免なさい。」と、初々しい凜とした女の聲が響いた。

お初は「はい。」と、勝手の方から答へて「何方？」

けれども玄關へは姿を見せない、客は又くりかへした。

「御免なさい。」

「菊ちゃんや、お客様だよ。」と、お初は恚う云つてお菊に取次を命じた、お菊はバタ／＼と玄關へ走つて來たが、

「何方？」と、愛くるしい嬌態をつくつて半分體を玄關の外へ出した。

「あの……。」と、客の女は稍ためらつたがバツチリとした眼を睜つて「お宅は菊枝さんのお宅でいらつしやいますか。」

「え。」

恚う云つてお菊は客の女を凝乎と眺めた、年頃は自分と同じ頃で、品の好い銀杏

返に頭髮を結つた、荒地は紫の矢絰の袴を着て、カシミヤの袴を穿いてゐる、足は佛蘭西形の尖のトンがつた恰好のよい女靴を穿いてゐる。

「御免なさいまし。」と、叮嚀に會釋をしながら客は玄關へ入つて來た。

「あの何方から……。」

「貴女菊枝さんでございますか。」

「え。」

「さう嬉しいわ、妾ね、淺井の晴子でございますの。」

お菊は淺井老人から娘の事は聞いてゐた、學校は仍且自分も入學しやうとする下谷の第一高等女學校にゐる事も聞いてゐた。

「まあ貴女、淺井のお嬢様、さお入り下さいました。」と、お菊は勝手へ走つて來て母親のお初に囁いた。

お初は吃驚したやうに眼を圓くして濡れ手拭で手を拭きながらお菊と一緒に玄關へ出て來た。

「さアお嬢様、此様見苦しい宅でございますが、どうかお入り下さいまし。」

怩怩してゐた淺井の娘の晴子はやつと決心したやうな態度で、

「では御免下さいまし。」と、靴を脱いで玄關へ上つた、お菊は靴を揃はしてお初に囁いたが奈何にも欲しさうな顔であつた。

晴子はお菊とお初の案内で奥の、清太郎の居間にしてある座敷へ通された。

塀を越して彼方に聖天の森が、秋日和にすつくり美しい輪廓を現はして爽快しく見えてゐる、一團の小學の生徒が男女入亂れて唱歌を唄ひながら竹屋の渡場へ行くのが聞えた。

やがてお初は茶と菓子運んで來た、其の間、晴子とお菊は顔を見合せては、お互に耻かしさうに俯向く、

「お嬢様つまらない物でございますけどもおつまみ遊ばして……。」

「難有う。」と、晴子は微かに云つて、紫の風呂敷へ包んだ土産物を體裁悪さうに取り出した。

「あの。」と、稍羞かみながら土産物の半襟と女の手袋をお菊の前へ差出した。

「ね菊枝さん、ほんの妾の志なのよ、怒つちや可厭よ、お土産のお印なの。」

「まあ、お嬢様そんな事を遊ばして……どうかお構ひ下さいますな。」

「でも折角もつて来たんですから、取つて置いて下さいな。」

「さうでございますか、難有うございます。」と、母親のお初はお菊に代つて禮を述べた。

品物の善悪は兎に角お菊は晴子の志を篤くうけた、こんなものを其れ程までに思つて呉るかと思ふと、浅井親子の親切が非常に嬉しく頼母しく感じたのやあつたお初は素よりお菊は叮嚀に禮を繰返したのであつた。

晴子は凝乎とお菊の容子を見てゐたが父より聞いてゐたよりも、お菊の利巧さうな奈何にも初心な舉動が氣に入つて、最う何だか古くから交際つてゐた友だちのやうな氣分になつて了つた。

「ね菊枝さんいつから學校へいらつしやるの？」と、晴子はクル／＼とした眼を睜

つてお菊に云つた。

「まだ解らないんですもの。」

「さう、早く學校へいらつしやいよ、妾と仲善く遊びませうね。」

「どうか……。」

此の時、起つて行つた母親のお初は朱塗の盆に、お汗粉を四つ載せて運んで來た。

「お嬢様、ほんのお口汚しでございますよ。」

「あら叔母様そんな事をなさらないで下さいな。」

「満らないものでございますけども……お嬢様は甘い物はお嫌ひでいらつしやいますか。」

「大好きなんですの。」

「宅のお菊も大好きなんですございますよ。」

「お嬢様どうか召上つて頂戴。」

「頂戴しますわ。」



晴子は遠慮せずに箸を取つた、お菊もお汁粉の馳走を美しさに喰べてゐる。  
やがて又お初は茶を運んで来て行つて了つた。

「御緩り。」

「難有う。」

お菊は兄の書齋にある和洋の書籍類を出して来た、さうして晴子に見せた、二人は黙つて見てゐたが、

「ね菊枝さん失禮ですけども妾解らない處があつたらおさらへをして上げてよ。」

「どうか。」

「あの……。」と、晴子は稍躊躇つて「地理や歴史は勉強していらつしやるの。」

「え、ちつと許り……妾、さつぱり解らないんですもの、兄様に笑はれて許りゐるんですよ。」

「妾ね、毎日来るわね、あ、其れよりも妾の家へいらつしやいな、好いでせう。」

「難有う、妾、お嬢様のお宅へ伺つても宜うござんすか。」

「構ひませんとも……阿父様もね、恚う云つてゐましたわ、妾にね、お前が行つて誘はなくちや可けないつて……。」

「ではいつでも伺つてよ。」

「え、いつでもいらつしやい、さうして二人仲善く勉強をしませうね。」

「どうかお願ひ申します。」

「今、どんな物を勉強していらつしやるの。」

「此處へ持つて参りますから。」と、お菊は自分の部屋へ走つて行つた、さうして紫の風呂敷包の讀本を携へて入つて来た。

「こんな物ばかりなんですの。」

晴子は夫を一々と手に取つて眺めた。

「皆小學校でつかつてゐる物ばかりね。」

「え、妾、あの尋常四年までしきや上らなかつたんですから。」

「さう。」

其れから二人は地理や歴史や数学の話やら研究を初めて、晴子は教授の格でいろく親切に難かしい個所を教へなどした、次の室で其れを聞いてゐたお初は實に何とも云へない程それが心のうちで嬉しかつた、それと同時に、此れが自分の腹を痛めたおふねであつたならひとり心の底で泣いても見た、けれども深く深く思つて見ると、逝つた妹のお玉が實意を籠めた遺書がおのづと頭の中に湧いて来て、おふねよりも華族の落胤であるお菊を教育して行く事の却つて自分の義理やら務めであるやうにも感じた、すると、其處へおぼろげながらお玉の影幻が煙のやうに現はれて、自分や倅の好意を痛く感謝するやうな素振が見えた。

お菊は恁麼事は夢にも知らずに、晴子を師として日の暮れて來るのを忘れて、一生懸命に勉強してゐる。

耽

溺

塚本要と舟子の艶聞は幾種かの新聞で、日を違へて素破抜かれた、耳敏い情界の

新派の俳優と許り思つてゐた手合は、皆舟子の物好きなのに驚いた、さうして藝人喰に妙を得たのが、さういふ書生肌の、而も文士などを情夫にした事を仍且舟子の物好きな浮氣の所爲に極めて了つた。

それが其れから其へ傳つて、舟子に喰はれた藝人たちは、陰ながら塚本の、今に秋の扇のやうに捨られるのを噂し合つた、誰一人永くつやく事を云つたものはなかつた。要は毎日々々狭い家で、濁つた暗い氣分を吸ふのが些か飽きて來た。さうして晴やかな暢りした空氣に觸れて見たいやうな氣がしてならなかつた、其れが又舟子の眼には能く見えてゐたのである、其れと同時に、世間の人たちの自分に對する風評も痛切に耳へ入つて來た。

で、生れつきの、負ん氣の舟子は誰が何と云つても、どんな手段を施しても、どういふ苦勞をしても、塚本と別れるものか、と云ふ熱烈な情が迸つて出て、只管塚本の機嫌ばかり取つてゐた。

だから塚本は毎日々々ぶらりと遊んで許りゐた、ちつとも筆を執らうと云ふ氣

にはなれなかつた、けれども毎日ぼんやり許りしてゐられないので、舟子を誘ひ出しては丸善へ行つたり東京堂へ行つたり、粗山書店へ廻つたり博文館や春陽堂へ立寄つたり、内外の新しい文學書や雑誌を漁つて買つて歩いた、舟子は男の道樂は安いものと思つて、其れを喜んで要に買つて與へた、で塚本の居間なり自分の居間にしつてゐる奥の六疊の室は近頃になつては學者の室のやうに變つて來た、書架も出來た立派な朱檀の机も調つた、脇掛椅子も据えた、たま／＼來る箱屋などは眼を圓くして其の不思議な變化に驚いた。

しかし舟子の塚本を慰め、自分に對する慷慨の情を防ぐ手段としてはまだ／＼此様事では足らなかつた。

芝居と云ふ芝居も觀に行つた、六區は素より新聲館や錦輝館邊までも活動寫眞を觀に行つた、寄席と云つたら雷門前の並木亭を初めとして須田町の白梅や芝の惠知十あたりまでも遠出したものだ、それから郊外の散策にも自動車を驅つて大宮公園や所澤の飛行場や鎌倉の七里ヶ濱へも行つた、鹽原に三日、湯河原に四日、箱根

に一週間と云ふ風に遊び廻つた、其の費用ばかりでも大したもののである、菊枝の廢業から受取つた千五百圓も悉皆遣つて了つた、倉富子爵を欺いては貰つて來る金も遣つたし其の他の馴染客からせびり取る金は、皆塚本と遊び廻る費用に提供した、だから呉服店や小間物店や其の他の借金は大分嵩が積んで來た、其の經濟の苦しい事を塚本には見せまいとする舟子の苦勞は並大抵ではなかつた、しかし今まで慥ふ云ふ方面に苦勞のない塚本には其れが解らなかつた、唯、舟子が客の處へ馳つては一晚のうちに多額の金をもつて來るので、世の中には随分鼻毛の長い客もあるものだと私かに思つてゐた、又塚本を兄様と偽られて眞實に思ふ莫迦息子などの惚氣を現實に見せつけられて、慥うして情夫扱ひにされてゐる耽溺が、至極面白い劇的なものとも思つた。

小春日和の暖かい午後、塚本は長く寝轉んで、ワイルドの「つまらぬ女」を讀んで一人クス／＼と笑つてゐた。

すると、其處へ老婆のお道が一通の手紙を携へて徐に入つて來た。

「旦那様、お手紙が参りましたよ。」

「さう。」と、塚本はお道の手から受取つた手紙の封筒を見て「あ、清ちやんから遣したんだ。」

「今戸の旦那から。」

「うむ。」と、塚本は封を切つて讀むと、其の文面は、清太郎が賣買用で關西地方へ旅行をするから留守は頼むと云ふのであつた、塚本は其れを讀んでまだ「清太郎は自分を信じて呉てゐるものと思ふと、何だか胸が充滿に込上げて来て、悲しいやうな嬉しいやうな妙な気分になつた、尙其の手紙の末筆にはお菊が其の内に第一高等女學校へ入學する事も書き添へてあつた。」

「婆やさん舟ちやんは？」

「あの……只今房の家さんへいらつしやいましてお留守でございますが……？」

と、お道は奥の座敷へ體だけを半分出して云つた。  
塚本は黙つて軽くうなづいた、お道は凝乎と要の容子を見てゐたが、別に用もな

さ相なので勝手の方へ行つた。

要は殆んど無爲に苦んでゐるので、何か氣に向いた脚本でも書いて見たいと云ふ希望も起して見た、けれども、近頃怠け勝な情性が無暗に筆無性にしてしまつて、筆を取る勇氣も出て来ない。唯、あゝして慙うしてと、頭腦の中で概畧の考案などに耽る許りであつた。

しばらく那樣感想に囚へられてゐた要は不圖舟子がどうして房の家へ行つたのか其れが些か氣になつた、政畧から舟子に取入つた最初の計畫は、見事に巧妙な舟子の逆襲に陥されて了つた、其處に青年には有勝な色慾の誘惑に釣られて、今では主客を顛倒したやうな形もある、其れ丈に、舟子が家に見えないと何となく嫉妬の念も出て来るのであつた。

「婆や。」と、要は寢轉んだ儘で叫んだ。

すると、勝手に何か洗物をしてゐたお道は、汚れた手拭で手を拭きながら次の座敷まで来た。

「お呼びになりましたか？」

「うむ。」と、要は句切つて稍ためらつてゐたが「房の家から呼びに来たのかい。」

「いゝえ、姉さんが勝手にいらつしたんですよ。」

「何だらう、どんな用だらう。」

「さ、何用でございますか。」

「又八々と違ふかね。」

「さうぢやございませんまい。」

要は黙つて考へてゐる、恰度、表の入口前でコトンと俥の轆が下される音が聞えた。

荒つぽく格子の啓く音がして、氣急しく入つて来たのは舟子であつた。

何か不安に囚へられてゐるやうに、妙に眼が曇つて、きよとくしてゐるやうな

風情が見えた、さうして別に要には氣を配る容子もなく簞笥の前に立つた。

「どうしたんだい、え舟ちやん。」と、要は不思議さうに訊いた。

舟子は黙つてゐたが、突如として簞笥の環へ手を掛けながら、

「ね貴所、今日何處へも出ないんでせう。」と、要の顔を見成つた。

「別に何處へも？」

「ではね、貴所の着物を一寸借りますよ。」

「どうするんだ。」

「何んでも好いちやないの、一寸妾用があるの。」

今日まで舟子は何様に苦しくつても、まだ要には質屋行の醜態などは見せた事はなかつた、もつとも今日も要には眞逆質屋へ行くのではあるまいと思つた、那樣事は一寸氣がつかなかつた。

「借りても宜うござんすか。」

「構はないよ、僕には餘り其れを拒絶する資格はないんだからね。」

「あら、那樣譯で云つてゐるんぢやないわ。」と、舟子はうらめしさうな眼をして折角啓けかけた簞笥を音高く締めたが、其の反跳でガタビシと家の中が揺れた。

その拍子に、帳篋の傍にあつた、小さい花瓶の、ダリヤの花が蓋もろともボタリと疊の上へ落ちた。

しばらく二人は顔をちろり／＼眺め合つて黙つてゐた。

「ぢや宜うござんす、妾の着物をもつて行きますから。」

「イヤ僕の物だつて構はないよ、僕は何處へも出ないんだからね、お前こそ着物を持出したらお座敷へ行くに困るだらう。」

「そりや……。」と、舟子は又躊躇つてだから「一寸貴所のを借るんだわ。」

「もつて行くな、また八々に敗けたんだね。」

恸う云はれたんで、舟子は莞爾として要の方を見返した、要は仍且笑つて又本を手に取つて讀み初めた、舟子は篋を啓けて要のために新調した秋の物から冬の物を着物や羽織長襦袢と順に七八枚抜き出した、さうして風呂敷に丁と包んで、

「婆や。」と、靜かに呼んだ、要には質屋へ運んだと云ふ直覺が出来た。

舟子は質物を老婆のお道に命じて、日頃出入の質屋へ運ばした、さうして其の歸

つて来る間、今朝まだ見なかつた都新聞の艶種を讀んでゐた。

「ね貴郎。」と、舟子は次の座敷から奥の方を向いて聲を掛けた。

今、雑誌の小説を讀んでゐた塚本は、舟子のゐる方を見ながら、

「呼んだの。」と、應へた。

「え、今帝劇でやつてゐる西洋のお芝居つてえのは面白いんですか。」

「さ、まだ見ないから解らないけれども餘り面白いもんぢやないだらう、僕等が見たら些とは利益にもなるけれどもね。」

「やつぱり難かしいお芝居？」

「あ。」

「妾は用があるから行けないけれども、貴所行つていらしたら奈何。」

「僕かい。」

「え。」

「何なら家の中へ入つてゐると、氣が屈するから行つていらつしやいな。」

「行つて来やうかね。」

「さ、妾お寶を上げるわよ。」と、舟子は紙入から五圓の紙幣を一枚取出した、しかし其の一枚は唯一枚の紙幣であつた。要は舟子が苦しい事を知つたが、慙ういふ場合にも尙苦しい處を見せまいとする、其の意地の強い處はいかにも藝妓らしい氣分が溢れてゐると私に敬服した。

「舟ちゃんお前は行かないのかい？」

「え、妾ね一寸用があるから今手離せないのですもの、いづれ緩り何處かへ行くわね、ちつと働かないと。」

要は黙つてうなづいた、舟子は衝と長火鉢の處から起つて要の傍へ来た、さうして箆筒から着物を取り出した。

「洋服にしませうか、それとも裕を？」

「着物を着やう。」と、要も起つて寢巻にしてゐた本ネルの單物を脱いだ、舟子は不圖襯衣が餘りに汚れてゐる事を見て、

「あら妾ちつとも氣がつかなかつたね。」と、云ひながら箆筒の下の抽斗を啓けて襯衣を探したが見附らなかつた。

「ないのね、ちや今日は其れで我慢してゐて頂戴、妾、今晚にでも婆やに取りに遣りますから。」

「まだ大丈夫だよ。」と、要は濼い御召の無地に見える御納戸縞の裕を着やうとした。

「あら、丁と長襦袢を出してあるぢやありませんか。」と、舟子は自ら起つて後へ廻つて引掛けて遣つた、焦茶色の、羽二重に竹の葉をあしらつたのであつた、要は長襦袢の襟を掻き合せてゐると、舟子は細い縹子の下紐を取り出して来て襦袢の下締にして遣つた。

「あら。」と、舟子は思出したやうに要の顔を眺めて、貴所さつき何處へも出ないよ云ふから、好い襦袢と着物を持たせて遣つただけども、妾の方と換やうからし。」

「構はないよ、僕は着物なんか何んでも好いさ。」

「だつて妾が笑はれるから。」

「面倒くさいからこれで結構。」

「構はない。」

「那樣心配をすると頭髮が禿げるよ。」

こんな戯談口を聞きながら舟子は要に着物を着せて遣つてゐた、さう憚うしてゐる中に老婆のお道が歸つて來た。

「姉さん。」と、呼んだので、舟子はいそいそと勝手の方へ行つて何やらヒソ／＼と囁いて居たが、要の傍へもどつて來た。

「貴郎、もつとお寶を上げませうか。」

「もう澤山だよ。」と、要は中折帽を冠つて細い籐のステッキをもつて出て行つた。

舟子は塚本が出て行くのを見送つてから帯の間に挟んであつた紙幣の數を勘定して紙入に打込んで立掛つた。

「婆や、妾ね、今晚一寸遅くなるかも知れないから、旦那が歸つて來たら内緒に知らしてお呉れよ。」

「は、宜ござんす。」

舟子は家を出て藝妓新道を出やうとする路次口で、摺違つたのは何だか見た事のある俵夫であつた。

舟子は行過ぎながら立停つて誰だつたらうと首を捻つて考へた、やつと思出した其れは今戸の兄が能く乗つてゐる帳場の俵夫である事が解つた。

で、舟子は俵夫の行く先を振返つて見てゐると、自分の家の前で立停つた、舟子は妾の處へ來たんだと思ひながら何事かと思つて小走りにもどつて來た。

「若衆さん何だい？」

「あ、姉さんでしたか、確た只今貴女だつたとは思つたんですが、若や違ふと可けませんから廢ましたんですが……。」と、俵夫は汚れた手拭で汗を拭きながら「實に姉さん大變な事が出來ましたんで……。」

「え、大變な事つて何有？」

「今戸の御隠居様が今朝卒倒なすつて……いろ／＼とお醫者様が來てゐますんで



すがどうも具合が悪いので……。」

「まあ。」と、舟子は眼を光らせて「ぢや妾憐うしてゐられないから、若衆さん一寸濟まないがね、千束町の中寅へ行つて俵を一臺支立させて遣して頂戴。」

「へい承知をしました。」と、俵夫は馳け出したが、舟子はあはてながら「あ一寸一寸若衆さん。」

「まだ御用で？」

「あのね、其れから直ぐ今戸へ引返してね、妹がゐますから妾がすぐ来るからつてさう云つてお呉んなさいよ。」

「宜うございます。」と、俵夫はうなづいて馳けて行つた。

舟子は格子を啓けて家の中へ半分からだを入れながら、

「婆や、妾ね、今戸の阿母様が卒倒したんだつてから此れから今戸へ行くから、お前電話で房の家さんね、憐う〜だから姉さんは今戸へ行きましたからと云つて断つてお呉れな。」

お道はやつと家の中から顔をだしたが、眼を一層シヨボ〜させて、

「今戸の御隠居様が……まあ大變でございますわね。」

「好く房の家さんへ云つてお呉れな、其れから妾が歸らなかつたら、旦那へもさう云つてお呉れね。」

「え、宜うござんす。」

其のうちに丁場の俵が駆けて来た、舟子は飛乗るより早いか今戸まで命じたので俵夫は狭い路次を韋駄天のやうに駆け出した。

小半時間も掛らぬうちに、今戸へ着た、直ぐ舟子は玄關から飛込んで見ると、常に母のお初が居間にしてゐる處で、母親は床の上に横に伏して眼を鎖て寝てゐた、妹のお菊は最う眼を泣腫して枕元に丁と座つてゐた。

「菊ちゃん阿母様どうしたの？」

姉の聲を聞いたお菊は俄破と舟子に縋りついて、

「姉さん。」と、唯一言、もう涙は留度もなく頬へ流れて来た、口も碌々利けなかつ

た。  
近所の人だけは清太郎が關西へ出發する前に依頼もあつたので、其の留守は注意はしてゐたが、眞逆、こんな重大な事が起らうとは更に思つてゐなかつた、しかし起つて見れば頼まれた事を反古にも出来ないで、お菊を輔けて種々とお初の看護をしてゐたのであつた、もつと早く知らせる筈の處であるが、お初が曾て清太郎の口止で、身内の者が藝妓をしてゐると云ふ事を隠してゐたので、お菊も黙つてゐたけれども餘り心細くなつたので、耐え切れなくなつて俵夫に知らせに遣つたのであつた。

「菊ちゃん一體阿母様はどうしたんだい。」

「姉さん今朝ね、阿母様は被官様へお詣りに行つたのよ、するとね、仁王門の傍でひつくりかへつたんですつて、其れを交番のお巡査さんが介けて下すつてね俵に乗せて家へ歸して下すつたんですけれども、其れからだん／＼に口も利けなくなつて……。」

「お醫者様は何と云つて！」

「脳何とか云つたわ。」

「兄様は昨日大阪の方へ行つたんだつてね、知らせて遣つて……。」

「え、今お隣の伯父様に頼んで電報を打つて頂いたのよ。」

「其處へ隣家の主人で肥つた赤ら顔の眼に愛嬌のある人が入つて來た。」

「飛んでもない事だね。」

「舟子の見舞にお初はやつと眼を細く開いて寝てゐた儘に舟子を見た。」

「阿母様しつかりしなくちや可けないよ。」

「姉さんが解つて？」と、お菊も姉のあとから附加へて云つた。

お初は曇つた光の薄いどんよりとした眼で凝乎と舟子とお菊を眺めてゐたがまた其の儘眼をつぶつて了つた。

「阿母様兄様が今晚歸つて來るから、其れまではしつかりして頂戴よ。」と、舟子は耳元近くで云つた、又、お初はもうさうに眼を開いて舟子を眺めた。

お菊は隣家の主人と何やら囁いてゐたが衝と起つて勝手の方へ行へた、間もなく格子が啓いて誰か外へ出て行くやうな気色であつた。

「お菊は？」と、お初は低い力のない聲で訊いた、舟子は隣家の主人を顧みて黙つてゐると、

「今、電話を掛けに行きましたから。」と、隣家の主人が口を狭んで勝手の方へ起つた。

「阿母様何か菊ちゃんに用があるの？」

「おふねや。」

「は何？」

「誰もゐないか。」

「いえ誰もゐないわ。」

「妾は最う迎ても助からないからね、お菊の事は兄様と相談をして宜しく頼みますよ。」

「まあ阿母様、そんな心細い事を云ふもんぢやありませんよ、お医者様は大丈夫癒ると云つていらしたから那樣心配をしないで氣を丈夫にもつて下さいよ。」と、さすがに母親の瀕死の態状を見て舟子は悲しさに聲を顫はせて判然と云つた。

お初は奈何にも元氣のない、諦めをつけたやうな生氣のない顔をして、

「迎も駄目です。」と、微に云ひ切つてから稍起き直つて舟子の手を掴んだが、涙の充滿に溢れてゐる顔を上げて「ねおふね、妾お前に云つて置く事があるんだよ。」

「妾に？」と、舟子は膝を蒲團の上に乗るまで押進めた。

「お菊の事なんだよ。」

「菊ちゃんの事？何様事を？」

お初はどうやら内緒事のやうに虚呂虚呂と眺め廻してから、

「あの子はね、お前の妹ではないんだよ。」と、思ひ切つたやうに云つた。

「えッ菊ちゃんか……？」

「實はね、妾の妹のお玉の腹から生れた子なんだよ、お前には姪に當つてゐるの

だよ。」

「あの吉原にゐた小母さんの子ですか。」

「あ、しかもお前お菊の阿父様と云ふのはね、華族様で倉富様と仰有る方なんだよ。」

「えッ倉富様……。」と、舟子は吃驚したやうに眼を瞬つて母を眺めたが「あの橋場にいらつしやる倉富様。」

「確かさうなんだよ、妾はお玉からくれぐれも大事にするやうに頼まれたんだがつひくお菊を粗末にしてお前の處へなど遣つてお玉には申譯のない事をしました、だからお前と喧嘩までして廢業をさせたんです。」

「兄様も御存知なの。」

「いゝえ、兄様はね、お玉の腹から生れたと云ふ事は知つてゐますけども、倉富様の胤だと云ふ事は知りません、逆も兄様の歸つて来るまでは妾の命は難かしからと思ふから、妾はお前に遺言をして置くんですよ、どうかく兄様と相談をしてね、お菊を立派な一人前の女にして生の阿父様に會はせて遣つてお呉よ頼みましたよ。」

愠う云つてお初は其の儘眼を塞いで了つた、舟子は初めて聞いたお菊の身の上を羨ましいやうにも、妬ましいやうにも思はれてならなかつた、もうお初は大切な事を遺言したのだから、安心したやうに眼をつぶつてゐる、其處へ隣家の主人は一通の電報を携へて入つて来た。

「おふねさん電報が来ましたよ、どうやら清太郎様からのやうです。」と、舟子に手渡した、初子は開いて見たが、

「あ阿母様兄様から明日歸るつて云つて来ましたよ。」と、電報を見せながら強い口調で云つた、お初はバチリと眼を開いた。

お菊が外から歸つて来た。

## 學 校 通

清太郎の歸宅する三時間前、果してお初は眠るやうに絶命して了つた、舟子を初めお菊の悲哀は一入であつた、唯、もうウロウロする許りであつたが、隣家の主人

や近所の人だちが親切に世話をして呉た、塚本も馳せつけて何くれなく、二人を助けて跡始末に頭を痛めたのであつた。

清太郎は歸宅して餘りの以外に殆んど口を利けなかつた、しかし手を束ねてゐる事も出来ないで勇氣を鼓して葬式の準備をした、醫師の診断書によると急性の腦卒中と云ふ事であつた、翌る朝、清太郎が喪主となつて相當な葬式が営まれた、其れには大勢の銀行員や會社員又は藝妓などが列に加はつてゐた、一際目立つたのは馬車で會葬をした淺井親子であつた。

初七日の佛事も滞りなく濟んだ、其の席には塚本も家族同様の資格で列つてゐた。淺井親子も交つてゐた、殊に皆なの視線を集めたのは、淺井の娘の晴子がお菊を實の妹のやうに可愛がつて庇つてゐた事であつた。

此の不幸の間に、第一高等女學校からお菊宛に召出狀が來た、其れは特別の同情

から遣した受験召集狀であつた、お菊は必死の覺悟を以て其の入學試験に應じた、清太郎はお菊の歸宅を待ち兼ねてゐた、やがてお菊は莞爾々と笑顔をして歸つて來た。

「どうしたお菊、試験は難かしかつたか。」

「え難かしかつたわ。」

「答案は皆な出來たのか？」

「大概出來てよ。」

「自分で合格したやうに思ふかい。」

「解らないわ。」

「其れちや困るな、合格したと云ふ自信がなくなつちやね。」

「ね兄様、師團と云ふのは兵隊さんのゐる處でせう。」

「さうだ。」

「日本には幾ら師團があるかつて聞くのよ。」

「お前は何と答へたい。」

「だからね、そら兄様に教はつたでせう東京仙臺名古屋大阪廣島熊本あの夫れから金澤、京都に青森に札幌、あのく其れからね豊橋に宇都宮。」

「青森は可けないね、弘前と云ふ處だ。」

「さう跡は忘れたから書かなかつたわ。」

「うむ、其れまで書いたら大抵好いだらう、しかし能く其れ丈でも覚えてゐた、豪い。」

「其れからね海軍の兵隊さんのゐる處を書けと云はれたから、真先に横須賀を書いてよ、其れから吳、佐世保。」

「うむ、其れも好い。」

「歴史は難かしかつたわ。」

「どんな事を問はれた。」

「三種の神器つて何様ものだと云ふのよ。」

「そりやお前に兄様が教へた筈だつた。」

「は、だから其の通り字を忘れたから假名で書いてよ。」

「さうか、假名でも構はんさ、算術は？」

「大抵當つてよ、浅井のお嬢様に聞いたら皆な當つてゐるんですつて……。」

「恁麼事を云ひ合つて其の日一夜を明かした、其れから一週間許り經つて學校から清太郎宛にお菊の入學通知書が到着した、清太郎は非常に喜んだ、お菊も素より何事も手につかない程にうれがつて、早速其の事を浅井の晴子に知らせたで、晴子は取るものも取敢ず馳つけて來た、さうして浅井からと云つて女の袴地を一反立派に熨斗をつけて祝にもたせて遣した。」

「ほんとうに菊枝さんお芽出度うよ。」

「難有う。」

「阿父様もね、何様に喜んでいらつしやるか知れないのよ、もう明日から學校で御一緒に遊べるわね。」

「え、妾、何だか夢のやうに思ひますわ。」

清太郎は晴子に篤く禮を述べた、浅井老人にも言づけを頼んだ、さうして尙晴子に向つて將來とも宜しくと叮嚀にお菊の身の上を依頼した、晴子は清太郎が妹思ひの美しい心に痛く感動をしたのであつた。

いよ／＼お菊は一月の一日より女學校へ通ふ身の上となつた、かねて夢想した女學生の境遇が今では我が身の上となつて嬉しさがいつまでも／＼忘れる事は出来なかつた。

友染模様の振袖を着た雛妓姿が、筒袖に、しかも袴を穿いた學生姿に變つて、新蝶々や高鬚の頭髮が無雑作な束髪に變つたお菊の身装は、學校通の毎日々々仁王門から雷門を抜けて下谷竹町まで徒歩で行くので、たま／＼公園や觀音の境内で雛妓時代の藝妓や雛妓だちに會つた、さうして何れも友だちや姉さん株であつた手合を吃驚させたのであつた。

觀音境内の櫻紅葉の美しい朝であつた、いつもの通りお菊は學校へ行かうと思つ

て雷門の方へ差かゝると、バツタリと出會つたのは、雛妓をしてゐる際に、一番仲善くしてゐたぼん太郎と云ふ雛妓であつたが、もう少時見ないうちにぼん太郎は黒繩子の襟を掛けたお召の手筋の袷を素肌に着てゐた、さうして大きな蝶々に結つてゐたのが、もう結綿に結つてゐた、何とも云ひ得ない小意氣な風だつた。

「菊ちやんぢやないの？」と、ぼん太郎の方から聲を掛けた、振返つたお菊は眼を圓く光らせて馳寄つたが「ぼんちやんだわね、お詣り。」

「さうよ、まあ變つたのね。」

「こんな風は似合はないでせう。」

「能く似合つてよ、學校へ行つてゐるの？」

「さうよ、下谷の竹町なの、高等女學校よ。」

「好いわね。」と、ぼん太郎はつく／＼と感心したやうにお菊の恰好を羨ましいやうな態度が見えた、お菊もぼん太郎の姿の變つたのを見て稍驚いたらしい。

「ぼんちやん最う一本になつて？」

「え、妾も變つただせう、もう一月前なの、そら能く大金様へ来た十軒店の人形屋の若旦那ね、あの方に一本にして貰つたのよ。」

「さう、お芽出度う。」

「遊びにいらつしやいな、ね好いでせう。」

「難有う、そのうちにね。」と、お菊は叮嚀に辭儀をして別れて行く、ほん太郎は此れを凝乎と見送つてゐた。

やがて鐘樓堂の方からコッソソと小石を洋杖で轉ばしながら出て来た塚本が此れを見て、珍らしさうにお菊の姿を眺めてゐた、さうして何か深い感慨に囚へられたやうに太息を吐いた、

「さうだ、菊ちゃんは魔窟から救はれたんだ、其の救ふために骨を折つた俺は……：あゝどうして俺は此様に深く篋り込んで了つたんだらう。」と、要は人に云ふやうに獨語を云つた。

恰度、其處へ眞赤な顔をして咬へ楊枝で来たのは兄の豚勘であつた。

「お、要好い處で出會はした、一體手前は何處にゐるんだよ、俺が怖くつて姿を隠したんだな、さうだらう。」

「さうちやないよ、一寸都合があつてね。」

「どんな都合なんだ、さア吐せ、其の譯を聞いた上で俺にや了簡があるんだ、太い野郎だ、此の兄を粗末にすると罰が當るぞ。」

「兄様又酔つてゐるんだね、困るなア。」

「手前に厄介を掛けたかい、巫山戯るねえ。」と、豚勘は力任せに要の胸をドンと突いた、よろゝと要は轉びさうになつて危く立停つた。

「何を亂暴をするんだ、僕は最う兄様には用がない筈だ。」と、恚う要は云ひ切つて顔色を變へながら立去らうとした。

しかし豚勘は折角會つた要を取逃しては無心の宛が脱れるので、追蒐け氣味に要の肩尖を鷲づみに攫んだ。

「やい待てい要、手前俺の顔を見て逃げるのか。」



「別に逃げはしないが、もう用はないんだからさ。」

「其方になくつても此方にあるんだ。」

「大抵その用は解つてゐるから御免蒙るよ。」

「御免蒙る？」と、豚勘は要の顔を睨み返したが、行成と要の胸をムツと力任せにつかんだ、さうして血相を變へて「やい手前兄弟の情つてえものを忘れたんだな、

兄の困つてゐるのを見て弟の分際で打遣つて置いてもいいのか、那樣水臭い兄弟があるか。」

「能く那樣云ひたい方題の事が云はれるね、今日まで兄様はどんなに私を苦めたんだ、今までちつとも構はないのなら僕は何と云はれても詮方はない、けれども、お前は私を窘めては何様に金を持つて行つたんだ、イヤ其れ許ぢやないよお竹ぼうに會つても、會ふ度毎に、幾らかづゝのお小遣を遣つてゐるんだ、其れを忘れたのか能く圖々しく那樣事が云はれたもんだ、ちつと自分の事を考へて見たらどうだ、其れもだよ、全く困るんなら僕は兄弟だもの、自分の着物を脱いでも保護もしやう、

けれども……。」と、要は跡を云はんとして云ふ能はざるものゝ如く感情が激しく先づ涙が眼に溢れて來た。

默然としてゐた豚勘の鐵拳は矢庭に要の頭部へ飛んだ、要は打たれた箇所を兩手で押へて立停んで了つた。

豚勘は又力任せに要の肩を突いた、要はドシンと尻居に轉んだ、其れを豚勘は容赦もなく足で蹴つた、恰度、其處へ通り合せたのは倉富の殿様であつた。

「豚勘待てッ。」

その聲は凍として骨をも刺す心地がした、此の一言で延ばされた豚勘の猿臂は思はず縮んで、倉富子爵の方を顧みた。

「お、橋場の殿様。」

「貴様又弟を窘めてゐるのか、困つた奴だな。」

豚勘は頭を掻きながら俯向いた、倉富子爵は口惜さに泣いてゐる要の傍へ寄つて行つたが、やさしい聲に要に向つた。

「塚本、お前も困るだらう、私はお前の心の裡を察してゐる。」

要は子爵の顔を見たが宛ら電氣にでも感染したやうにブル／＼と顫へた、何のためであつたか、此の刹那には自分にも解らなかつた、しかし直ぐ其れは子爵の寵愛されてゐる舟子と自分が隠れて楽しんでゐると云ふ良心の苛責である事が直覺されたのである。

で、黙つて俯向いて了つた、恁麼事は素より子爵は知りさうな事はないのである。

「あ、其れから此頃お前はちつとも由縁會の例會にも出席しないさうぢやないか、どうしたのか、非常に熱心な方だつたが何か大作の著作にでも遣つてゐるのかな。」

要には何にも答へる事が出来なかつた、しかし其れは豚勘が口を挟む機會をつくつたのであつた。

「殿様、此奴はな、近頃姿を隠してゐるんでございます。」

「塚本が……うむ、實は私も一寸聞かんでもない、どうやら怠けてゐると云つて會員が心配してゐた向もあつた、若いうちは道樂も好い、けれども之を過しては可

けないの、どうも近頃の青年は皆な歡樂に許り耽りたがるから困るの。」と、子爵は要に誨へるやうに説かれた、豚勘の鼻息は稍荒つばくなつた。

「どうだい要、様ア見やがれ、兄を等閑にしてゐると其の通りだぞ。」

「豚勘、お前は那樣事を云ふ資格はないお前にも云ふ事がある、お前は何故金が入るなら私の處へ來ない、幾らチョン鬚を楯に取つて氣焔を吐いてもお前のやうな素行では人が相手にしては呉ないぞ其のチョン鬚は何のために遣して置くのだ、其の鬚の手に對して耻かしいとは思はないか。」

子爵の聲は高かつた、豚勘は思はず首をすくめた。

「お前はいつか弟の事を云つて賞めてゐたのう、成程、塚本は青年作家として相應に名をなしてゐるから豪ひには違ひない、けれども文士とか畫家とか云ふ手合は、幾ら偉くても名に於て成功してゐるので、到底物質……と難かしく云つては解るまいが、利益の方では偉くはない、貧棒に甘んじてゐるのが其れ等の人だちの職務だ、つまり其の人だちの貧困が一層腕を磨かせるのだ、名を高くさせるのだ、好い

かな、さう云ふ人だちを窘めてだ、好んば弟にした處で、無心を云つたり強請つたりしてはチョン鬚が泣ぞ、決してさういふ事はするな、一體幾らの金が要るのだ。」  
 慙う露骨に云はれたので、豚勘は頭を掻いて面目なげに俯向いてゐる許りで、何とも子爵には云ひ得ないのであつた。

「何故黙つてゐる、其の金は私が遣る、さア云へ、幾らあれば好いのか。」

「へい……誠にな何もはや其の……。」

「十圓か二十圓か。」

「へい……十圓もあれば……。」

倉富子爵はうなづいて紙入から十圓の紙幣を二枚抜いて豚勘の前へ差出した。

「豚勘、爰に二十圓ある、此れをお前に遣るからの、此れでお前の満足を買つて來い、酒を飲むも好い、女を買ふも好い、しかし決してチョン鬚を笑はれないやうにしろよ。」

「へい。」と、豚勘は恐るゝ二十圓の紙幣を受取つて眺めてゐる。

塚本も子爵の方を見て感謝の眼が光つた。

「豚勘もう一言お前に云つて置くが、此れから金が要るなら私の處へ來い、決して塚本を苦めたり、藝妓や待合や料理屋を強請つたり、そんな事をするんぢやないぞ、しかしさうかと云つて俺は子爵に知己があると云ふ自惚根性を出すんぢやないぞ、私はな、お前に惚れて金を遣るんぢやないぞ、此の前にも云つた事があつた、其のチョン鬚が戀しいのだ、お前の頭髪を見ると私は懐かしい江戸の俵がアリ」と眼の前に浮いて來る、其の思ひ出の印に金を遣るのだ、解つたか、わかつたら行け。」  
 「へい……。」と、豚勘は金を胴巻の中へ打込んでから、何遍ともなく頭をビヨコビヨコと子爵の前に下げて「では殿様お言葉に甘へて今日は此儘御免を蒙ります、御免なすつて……。」

と、豚勘は足早に立去つて行く、要は凝乎と此れを見送つて溜息を洩らした。  
 「殿様、何ともお禮の申上げやうがございません。」

「何有、お前に禮を云はれる譯はない、あれに金を恵む理由はお前も今聞く通りだ

塚本、私も最う此東京が可厭になつた、私の憧れてゐた江戸の姿は全然打毀されて了つた、もう私も此の娑婆から葬られる時が来たかのう。」

「イヤ決して那樣事はありません、最早社會に皮相の文化に飽きて來ました、江戸趣味の復活が或る一部に萌して參りました、我々は極力其の復活をつとめてゐるつもりでござります。」

「いたづらに西洋の文物に酔つて、滅び行く日本を知らん奴等こそ憐むべきものぢや。」

要は此の一言を自分だちの憧れてゐる享樂主義を罵られたものと痛く感じた。

「塚本」と、子爵は鋭い口調で云つてから稍容を改められて「お前は一面に江戸趣味の復活を計りながら、一面に武士道の破壊者だと云ふではないか、私は繪入新聞記者の水田から聞いた、三田評論に筆を執つてゐる手合は大抵さうだと云ふ事だ、フラン西から輸入された享樂主義の權化だと云つてゐた、殊に窪田益太郎と云ふ男などは、最も甚だしい事を云つてゐるさうだの、日本人に生れながら武士道を呪つて

ゐると云ふぢやないか、言語同斷だ、さういふ奴は亡國の民と云ふ、私はお前に勧める決して亡國の民となるなよ、個人主義に囚へられて其の國を滅すやうな作品を世の中に出すな、日本の米を喰つて生きてゐると云ふ事を生涯忘れるなよ、私は享樂主義を呪ふ、我々因縁會のものは全力を擧げて江戸趣味の復興につとめるんだ、好いか。」

「は、はい。」と、要は恐懼して低く云つた。

倉富子爵は諄々と要を説いてから、思出したやうに、調子を柔げた。

「あ、うつかりしてゐた、此様處で立話をするんぢやなかつた、どうかい、何處か食事をしやう、まだ晝には早いのが。」

「難有うござりますが、まだ腹も減きませんから又いづれ其のうちにお伴をいたします。」

「イヤさう云はんで、私も何だか寂しいからつきあつて呉れ、久振で一直へでも行かうぢやないか。」